
真・恋姫†無双「外史の外史、ここにあるぞーっ！(改悪？版)」

日時々雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双「外史の外史、ここにあるぞーっ！（改悪？版）」

【Nコード】

N2814Z

【作者名】

日時々雲

【あらすじ】

ちよつと、どころではない環境で育ってきた、口の悪い主人公が頑張るお話。彼の存在は、外史にどのような影響を与えるのだろうか。

（とあるサイトにて、投稿してたのに手を加えたものです）

はじめに

この作品は、とあるサイト（名前出しは、一応止めておきます）で投稿していたものに手を加えたものです。

改良もあれば、改悪の部分もあつたりします。

初見ではわからないですから、問題はないのですが。

極力コメディにしたいですが、シリアスを含んじやいます。

まだまだ経験が足りないので、拙いです。

そして、原作キャラのキャラ崩壊が結構激しいです。

さらに、オリキャラも多数（10ぐらい？）存在します。

さらにさらに、主人公は（自重はしてますが）チートです。

最後に、アンチっぽいを含みます。

そんな要素が苦手、もしくは嫌いな方は、backでお願いします。

かなり長くなりそうですが、どうかお付き合い下さい。

第一話（前書き）

プロローグというやつです。

第一話

昔、むかしはるか後漢末期。

ある所にある少年がいた。

容姿は悪くなく、むしろ世間一般から見れば良い方だと言えるだろう。

そのくせ着ている服はみずばらしく、貧しただけで服が擦りきれてぼろぼろになっているとは言い難い格好である。
そんな少年がいま、暗い暗い穴の中にいた。

「……ううん、冷たいし、かてえなあ。下が土だから当然といえば当然かあ？」

（土？あん？）

「なんでこんなところにいるんだっけか？」

さかのぼること数刻前……

「うう……、腹が、げ、限界だ！」

少年は森のなかをさまよい歩いていた。
言わずともわかるであろう。

食糧調達の為である。

最後の食糧が尽きて数日が経っており、足元はふらつき、体力はもう限界だった。

「こんなことになるなら、最後の食糧をあの馬にやらなけりやよかつたぜ……。でも、ああも嬉しそくに食ってたし、しょうがねえか」

（やっぱり動物には優しくしないと、なあ。

動物愛護家たるもの、そうする義務があるぜ）

などと、独り言を呟きつつ、歩を進める。

「……って、楽観的になってる場合じゃねえ！ 僕……俺の生死に関わる問題だ！」

（まあ、別に俺がここでのたれ死のうが悲しむ人なんていないからいいんだけどな）

ヒステリックになつては、皮肉げに笑みを浮かべ、コロコロと表情を変えながら、さらに奥へと進んだ。

「おっと、あれは……」

すると、何故か地面から30〜40cmほど宙に浮いている（正確に言えば、吊るされている）林檎があつた

「……やった！ す、数日ぶりの食糧だッ！ この際、なんで浮い

てるかなんて気にしねえ！」

いつもの少年ならば、当然罨だと警戒したであろう。

しかし疑ってかかる暇も惜しむほど、腹を空かせていた彼は何かにとりつかれたかのように飛びついた。

この少年、馬鹿なのだろうか。

「いっしょっしやあ！ うむ、では早速、頂きm……」

（あれ？

なんだこの浮遊感は。

……嬉しすぎて、天に召されてるとかか？
洒落にならねえぞ！）

絶賛落下中であるのにそんなことを考えていられる辺り、結構余裕があるのかもしれない。

「まだ、まだ死にたくなああーいたっ！ ぐおおお……」

深くはないが、浅くもない穴底に尻から着地した少年は、急いで尻をさする。

「ケツがああああ！ ふう、結構痛いじゃないか……」

辺りに誰もいないのに——穴の中なのだから当然だ——平静を装う少年。

本当に馬鹿なのかもしれない。

「つか、痛いだあ？ はっ！ また、死に損なったか」

少年は、小さく憎々しげに呟いた。

「しかし、まぬけだなあ、おい。しかも、若干深めで出れねえし。……ま、林檎食べて、寝ますかね」

見れば誰もが、猪を捕らえる為の罠である、と気付く罠に引っ掛かった状況でなお、樂觀的だった。もう、馬鹿で良いのでは。

「う、……思い出ただけで、なかなか恥ずかしい」

（うん、これから気をつけよ。
だがな作者、貶しすぎだろーが）

思い返した少年は、深く反省することにしたようだ。
とりあえず、メタ発言は止めましょう。

「しかし、いい加減出ないと不味いな。……近くに助けってくれる人はいねえかなあ？」

期待はしねえが、な。

都合良くいるはずがないことをしりながら、そう声をもらした。

同じころ、ある少女もまた森の中にいた。

「初めて仕掛けた罫だったんだけど、うまくいったかな？」

初めてにしては上手すぎだわって伯母上様に言われたけど……大丈夫だよな？

そう小さく呟きながら、森深くに進んでいった。

「たしか、こちら辺に仕掛けたはず、なんだけどなあ……。」「森に入って早、半刻（一時間）。」

少女は、未だに見つけられないでいた。

「うーん、間違えたかなあ……。ん？」

「……思い……。けで、なか……。……。しい」

（声？が聞こえる……。捕まって騒いでるのかな？）

そう疑問に思い、そっちに足を運んだ。
すると……

「近くに助けてくれる人はいねえかなあ？」

……そんな声が聞こえてきた

（うん、ここは十八番しかないよね♪

あ、どこで十八番なんて言葉を知ったかは、ひ・み・つゝ

メタ発言は止めて欲しい。

「ここにいるぞー」

はつきりと、自身の代名詞である言葉を、声高々に言い放った。

「って、何処にだよ！」

とツツコミつつも、内心は安堵と驚きで一杯だった

たしか朝方、森に入ったとき晴天だったはずなのに、ほとんど光が入ってこない。

すなわち、木が生い茂っていて、かつ、かなり長く歩いていたはずだから森深くにきている……。

確実に誰もいなくね？

と、判断していたので、当然と言えば当然である。

思考に耽っている少年を尻目に、少女はひょっこりと顔を穴へと出し、口を開く。

「ここだけど」

至極当然、単純明快なことであつたのに、何故ツツコンでしまったんだろう、と少年かは少し後悔した。

「どうかしたのー？」

「いや、少し考え事をね。えと、この穴から出たいんだけど、若干深くて出れないから手伝ってくれないか？」

「うん、いいよ」 ちょっと待っててね」

待つこと、ほんの一時

植物のツル？が、少年の元に落ちてきた。

「それに掴まってね。案外丈夫で切れないから安心してね」

「ありがとう」

少年はツルを何度か引つ張り、強度を確認すれば、本当に一人を吊るしても切れないだろう、と思うほど丈夫だった。若干の警戒をしつつ、それをつたってよじ登ると、穴から出たところにさっきの少女がいた。

（さっきは光が少なかったから見えなかったけど、かなり可愛いなあ、おい）

と、少年が内心想うほどの頭に美のつく少女だった。

「ホント助かったよ、ありがとう。ええっと」

「たんぽぽはねえ、馬岱ってゆっの！」

これが少年と馬岱との出会いであった。

そして、後に、彼の少年は親友にこう語った。

「この頃かな、俺の掘った深い穴に光が射し込み始めたのは」と

第二話

日も少しだけ傾き始めたころ、中庭に五人の人物がいた。
うち二人はそれぞれ獲物を携えていた。

（いきなりだが、どうしてこうなった！！）

相対する二人のうち、片方は頭を抱えなくなっていた。

（冗談じゃねえぞ！

だってよ、目の前で女が十文字槍を振ってるんだが、風を切る音が
尋常じゃないんだぜ？）

勿論、槍の刃は潰してあるのだが、そこは最重要問題ではない。

というより、当人にはそんな些細なことはどうでも良いことであっ
た。

一番に気にしているのは、何故闘わないといけないか、それも女と
ということだ。

（まあ、何度考えても行き着く答えは一つだがな……）

そう考えながら、闘うはめになった原因の女性を睨みつける。

睨まれている張本人は、それを笑顔で受け流している。

どうやら実に楽しみにしているようだ。

10メートルほど間をあけ対峙し、戦わんと相対しているのは。
穴に落ちていた少年——真名を陽という——と、そこから這い上が

る手伝いをし、ここまで案内してくれた馬岱の従姉妹である馬超であつた。

「うっし、準備できたぞ！ さあ、始めようぜ！」

準備運動したほうがいいのでは？

本当に闘いたくない陽はそう問いかけ、無駄と言える時間稼ぎをしていた。

結果、実力を目の当たりにしてしまいさらに頭を悩ませたのは余談である。

「ホントに止めにしませんか？ 僕みたいな弱くて、剣を使ったこともない初心者と戦っても楽しくないでしょうに」

「いや、駄目だ！ 母上が強いって言ってたんだ。やるったら、やるぞ！」

（あの女の言うことを信じているのかよ。
だったらしい

まあ、母親の言だから当然とも言えるが、本当にやめてもらいたいんだが）

陽はよりいっそう落胆して肩を落とし、深いため息をついた。
すると――

「じゃあ、いくぜ！ ハアアアア！……！」

「ちよつ、待つ、いやあああ！……！」

――馬超は真っ直ぐ陽の方へ駆け出した。

何の構えもしてなかった陽は、逃げるより他なかった。

「あつ、コラ、逃げるなっ！」

「いいいやああだああ！」

真剣勝負になるはずが、鬼の変わらない鬼ごっこになりかわってしまっていた。

一刻前……

二人は森を抜けるべく歩いていた。

一人は軽快だったが、もう一人はおぼつかない足取りだった。

やはり、林檎一つなど気休めにすらなかったようだ。

「ねえ、ホントに肩を貸さなくても大丈夫？」

「うん、大丈夫。その気持ちだけ貰っておくよ」

フラフラと歩く様子に、馬岱はちよくちよく気にしてくれているようだった。

だが、森の外まで案内してくれてさえいるのに、これ以上借りを作るのは不味い、と陽は判断し、感謝の言葉を述べるのみに止めた。

「そっいえばさあ、何であんなところにいたの？」

「いや、まあ、その……」

（非常に答えにくい質問を……）

そう、陽は心の中で呟く

少し前に思い返していたことなので鮮明に覚えていたが、話すのを遠慮したいほどの失態だったため正確に答えるか否か迷っていた。しかし、助けられた身分であつたので簡潔に事の成りを話すことにした。

「あははっ、バカだねえ」

満面の笑みでいいのける馬岱。

そこには侮りも呆れの感情もなく、心底愉快そうだった。

馬岱の一言が陽の心に突き刺さる一方で、その笑顔に釘付けになっていた。

「どうしたの？ たんばばの顔に何かついてる？」

「いや、ただ笑顔が可愛いな、と」

「……っ！ や、やだなあ、もう！」

（頬が赤くなってる。

……熱でもあんのか？）

如何にも鈍感らしいことを思考する陽。

馬岱が顔を赤くしたのは、不意打ちの称賛の言葉に免疫がなかった

為だ。

それは、彼女の血筋特有のものである。

「ええ」と、とにかくお腹まだ減ってるんでしょ？」

「いや、問題ない…『ぐう』…こともないです」

慣れないことをはぐらかすように、あからさまに話題を変える馬岱。それを気に止めず、否定の意をこめたやせ我慢で返事をするつもりが、陽自らの腹の音に敢えなく失敗する。不様である。

「じゃあさ、家にこない？ 伯母上様も歓迎してくれるよ！ 伯母上様の作る料理本当に美味しいんだから！」

（伯母……ねえ）

親はいないのだろうか、この子は伯母の何を知っているのだろうか、何をもって歓迎してくれるといいきれなのか、実際に歓迎してくれるだろうか。

と、黒い思いを一瞬頭に廻らすが、すぐに尻ぎ払われる。陽の頭の中を占めるはご飯のことばかり。

「お言葉に甘えて行かせて頂きます！」

何故か張り切る陽。

幾分か足取りが軽くなったようだ。

こんな腹ペコキャラにするつもりはなかったのだが。

意外と近かつたらしい馬岱の家のある邑。

何度もいろいろな人に声をかけられながら——實際は馬岱のみに、だが——、奥へとぐんぐん進んでゆく。

「ここがたんぽぽの家だよ」

なんだ、ただの県城か。

少しだけ現実逃避をしたくなつた。

（城住みで、かつ見知らぬ奴を勝手に入れられる自由さ。……伯母はかなりの権力者か。

……馬岱もあつち側の人間らしいな）

陽は燦ぶる思いを胸に、馬岱に連れられ、庭を迂回して厨房の裏口にまわる。

其処には一人の女性が立っていた。

「只今戻りました伯母上様！」

「お帰りなさい。畏の方は……失敗したようね」

女性は馬岱の手に何も無いことを見て、そう言った。

猪が本当に取れていようがいまいがどちらでも良かったので、そんなに気にすることはなかったようだ。

「猪捕まえるのには失敗したけど、代わりに人間捕まえちゃったよ」

「……捕まえたのってそつちの子?」

「うん」

(あん? こつち見んなよ)

女性と陽は、視線を交わす。

睨むように見る陽に、女性は笑みを浮かべた。

「……蒲公英が初めて捕まえたのは食べないとね」

「ええっ!」「……は?」

女性のとんでも発言に、心底驚く馬岱と、何言ってるのコイツ、みたいな視線を送る陽。

「冗談よ、冗談」 大方お腹を空かせてるからって連れてきたのでしょう?」

「……う、うん」

「だったらご馳走してあげないと」

そういつて女性は厨房に入っていた。

女性を観察する為、口を開かないことにした陽だったが、きつい冗談には嫌でも反応させられことに、少しだけ感心した。

(成る程、厄介だ)

そう、深く思いながら。

「……じゃ、じゃあ中に入ろっか」

あの冗談は馬鹿にも効いたらしく、少しだけ気まずそうだった。
陽は気にすることなく黙ってついていった。

「さあ、た〜んとお食べ♪」

陽の前の机に、結構な量の料理が並べられる。

（どんな時間配分したらこんなに早く出来るんだよ）

自分自身で作ったとしても、これほどは早くはできないので、心からそう思う。

……涎をだしながら。

だからこんな腹ペコキヤラにするつもりは（ry

「本当にいいんですか？」

「ええ、早く食べないとさめちゃうわ」

「……では、頂きます」

一度合掌する陽。

陽自身、自分がなぜ食べる前に合掌するのかわからないでいるのだ

が。

幾度となく思考してきたことを頭にしまい、料理を口に運んでいく。

（美味しい）

そう思いながら、ものすごい速さで消費してゆく。

その速さは隣で食べている女の子に匹敵した。

「かなりあつたのに綺麗に平らげたわねえ」

「ご馳走様でした」

もう一度合掌する。

量に加え、質も良かったので、陽は心底満足していた。
そこに突然……

「坊主よ、剣をとったことはあるか？」

……違う女性が声をかけてきた。

「ないですけど」

「そうか」

「何か問題でも？」

「いや、問題はないんじゃないが、少し思うところがあったの」

うーむ、といいながら思考する女性。

陽自身も、何がなんだかわからなかった。

脈略もなければ、剣に触れたこともないのに、先のように声を掛けられたのだから、当然だろう。

「わからないなら闘って貰えばいいんじゃない？」

片付けを終え、戻ってきたさっきの女性が言う。

「ふむ、それもそうじゃのう」

「翠、この後暇だったでしょう？」

「ん？ そういやそうだな」

陽の隣で食していた女の子が反応する。

「だったらこの子と闘ってみなさい」

「はあ？」「えっ！」

女の子と若干空気になっていた馬岱が驚きの声をあげる。

「この子多分強いわよ」

「よっしゃ！ならやるぞ！」

迷わず返事をする女の子。

そうして勝手に話は進み、そして冒頭へと戻る。

実はこの会話、陽は殆ど聞いていなかった。

ずっと、剣についてを考えていたのである。

しかし、強引に連れて行かれ、成り行きを話され、対峙させられたのだった。

逃げる陽、追う馬超。

この後日が暮れるまで続いた。

この時の事を陽は語る。

「あのときの翠姉の目はマジだった」と

第三話

辺りはすっかり暗くなったころ。
城内の廊下を歩く五人がいた。

「明日だ！ 明日は絶対やるからな！」

「丁重にお断り申し上げたいです」

「やるつたら、やるからな！」

「嫌です、ホント勘弁して下さい」

「明日の朝またあの中庭だからな！ 必ず来いよ！」

「人の話を聞きましょうよ……。絶対行きませんから」

先の一騎討ちで闘えず、不満気な顔を露にしながらも再戦の約束を
こぎつけようとすり馬超。

命からがら逃げ延び、疲れきった顔をしながら丁寧になて断つてい
く陽。

諦め切れない馬超。
闘いたくない陽。

そこに、不意に助け船が現れた。

「はいはい、そこまでよ！ とりあえず部屋に入りなさい」

「むう」

無理矢理切り上げられたと思った馬超は少々むくれるが……

「明日のことはご飯のあとでゆっくりとね」

……船が出されたのは馬超の方であつた。

嬉々としている一方で、もう一方は激しく項垂れていた。

「「「「馳走様でした」」」」

「お粗末様でした」

「やはり牡丹の作る飯は旨いのう」

「ふふつ、料理だけは薙あてみに絶対負けない自信があるわ」

「他でもわしに勝ってみせる癖に料理だけとはよく言うのう。嫌味か？」

「そんなんじゃないわ。他はつかつかしてるとすぐ追い抜かれてしまつほど不安定なものじゃない。内心冷や冷やしてるんだから」

熟女どう、オホン……お姉様方で話が弾んでいるようだ。

牡丹と呼ばれた女性は、娘の馬超と同じように、（むしろ娘が真似してるのであるとか）濃い赤色の長い髪を頭の頂点より少し後ろで一つにまとめている。

そして、薊と呼ばれた女性は、薄めの紫の長い髪を後ろで2つに分けている。

二人とも、歳よりも若い雰囲気を持っている。

（それにしても、旨かったなあ）

そんな二人を気にも留めず、陽は料理の評価をする。
だから、腹ペコキャラ（ry

（……って何でまた馳走になつてんだよ！
逃げにくくなつちまつたじゃねーか！

ちっ！ あのととき逃げる好機だったのによお……。
あの猪娘、足速すぎなんだよ）

元々の陽のプランでは、昼飯を食べたら目を盗んでとんずらしようと試みていた。

しかし、突然闘わされる羽目に——実際逃げただけだが——なり、その所為による空腹に身を任せて流されるがままにしていたらいつの間にか……であつた。

どうやら流されるのが得意なようである。
馬鹿、ともいえるが。

「そういえばこの子、名をなんというのかしら、蒲公英？」

「あはは、……聞いてなかった」

不意に、牡丹と呼ばれる女性が、蒲公英に問い掛ける。

しかし、今の今まで聞いていなかったと気付いた馬岱からは、渴いた笑い声が響く。

「あはは、じゃないだろ！全く！」

「それで、なんというの？」

「姓名はありません、訳あって捨てました。ですが、命を助けて頂きましたのでどうか真名の陽、とお呼び下さい」

正直、名前を教えていなかったことを、陽は知っていた。しかし、これで会うこともないだろう、と考えていた為、敢えて教えようとは思わなかったのだ。

やはり侮れない、と陽は思った。

「そう……わかったわ。私たちも名乗りましょう」

名前を聞けて満足だ、と言わんばかりに笑みを浮かべ、牡丹と呼ばれる口を開く。

「私は馬騰、字は寿成、真名は牡丹よ」

「僕は韓遂、字は文約、真名は薊じゃ」

「あたしは馬超、真名は翠ってんだ」

「蒲公英の真名は蒲公英だよ」

各々で自己紹介する四人。

陽には名前はどっだっていいのだが、いきなり真名は不味くないか、
とは思った。

「此方は真名ぐらいしかお礼に渡せるものがないのでお預けしたの
ですが…… よろしいのですか？」

「よろしいのよ」

（軽いなおい！）

馬騰による即答にツッコミたくなったが、陽は自制した。

「……わかりました。大切にお預かりさせて頂きます」

（ま、別に構いやしねえさ。

どうせ会うのは今日かぎりなんだからな）

夜中にでも出て行こうと思っていた陽には、四人の真名など、本当
に些細なものだった。

「そう思っていたときもありました」

ある部屋で、独り言を呟いて頭を抱える者がいた。

先ずは、前言撤回からしなければなるまい。

夜逃げは夜するもので、朝にするものではないからである。

今までになかった結構な待遇を受けた陽は、戸惑っていた。
何時も通り逃げるか、否か。

（夜逃げ、ダメ、絶対！）

という温情に対する背徳心や罪悪感。

（夜逃げ？

はっ、違う違う。

俺は帰るだけさ、家と言う名の広大な大地に！）

という無茶苦茶な合理化による夜逃げの正統性。

この2つによる余りにくだらない葛藤の末、結局夜逃げを選択した
陽。

早速、扉の取っ手に手をかけ、押すが開かない。

何度も試みるが失敗する。

蹴破ってやろうか、などと一瞬思うが、流石に夜逃げをするに音は
立てられまい、と諦め。

さらに、此処までの旅路の疲労、頭をフル回転させた副作用による
突然の睡魔。

少しだけ、と寝台に就き睡眠。

起きたらまさかの朝。

という、なんとも馬鹿馬鹿しい展開である。

「おゝい、起きてるかゝ 飯だぞゝ！」

突然扉を押し入ってくる馬超に、思考が遮られる。

（ちょっと待て、今馬超は押して入ってきたよな）

陽は、凄く死にたくなつた。

そんなこんなで数刻後……

今日もまた、陽は中庭に剣をもたされ、立たされていた。

「お腹が減りました」

「噓つけ！ さっき食つたろ！」

「ちょっと厠に……」「さっきいつてただろうが！」「……むっ」

「準備運動は……」「もう終えた！」「……ぬっ」

「ああ、もう！ さつさとやるぞ！」

しびれを切らしている馬超。

どうしてもやらないと気が済まないらしい。

「は、初めてなんです！ 優しくしてください」

「どごその生娘の言葉か！」

まさかの韓遂から突っ込みが入ったことに、陽は少し驚く。
そしてそのまま、なかなかやる人だ、などと意味のわからない評価をした。

陽がまだまだふざけていると、馬超が怒りで震えだした。

（そろそろやめようか）

少し、腹を括った。

「はあゝゝ。じゃ始めましょうか」

そつ溜め息をつきながら、適当に構える陽。

剣を握ったことすらなかったはずが、自然と寸分の間もない中段の構えをしていた。

「へえゝ」「ほう」

牡丹と薊は揃って感嘆の声をあげる。

やはり見立て通りだ、と二人は思った。

「あれが初めて剣を持ったやつに見えるか？」

「見えないわねゝ。どう見たって熟練の剣士の構えじゃない」

「そんなに凄いの？」

馬岱が二人の会話に割り込む。

少しばかり槍術をかじっている為、剣とはいえ興味を惹いたらしい。

「そうじゃのう……翠はもしかすると負けるかもしれん」

「えっ！ お姉様が！？」

韓遂の言葉に、馬岱は驚く。

同じ槍術を習う、自分より遥かに強い馬超が負ける、と聞かされたのだから当然であろう。

「ええ、そうよ。蒲公英もこの闘いをしっかり見ておきなさい」

「はい！ 伯母上様！」

その元気の良い返事のすぐ後に、均衡は破られる。

「ハアアアアア！！」

雄叫びと共に槍を携え真っ直ぐ突っ込んでくる馬超。

馬超の流れるような降り下ろし、薙ぎ、切り上げなどの怒濤の攻撃が、容赦なく襲ってくるのが陽の目に映る。

本来ならば、見えるはずのない左目にも、である。

陽は普段、右目でしか世界は見えない。

何故なら、左目は包帯で封じているからだ。

そこに、無いわけではない。

見えすぎるから、封じているのである。

にもかかわらず。

ちょうど馬超の一撃一撃と重なる太刀筋が、陽の左目には見えていた——正確には、瞼の裏に浮かびあがってくるような感覚だった。

それに伴って、ズキズキと左目に痛みが走る。

それに耐えながら、陽は馬超のあらゆる攻撃を全て、避け、反らし、受け流す。

身体が覚えていると言っべきか、頭の記憶が身体を動かして言うべきか。

とにかく、全ての攻撃に対して身体が勝手に動いていた。

それは陽自身もよくわからない不思議な感覚だった。

「あたしを舐めてるのか！」

「……………」

一度攻撃の手を休め、下がりながら馬超は言い放つ。
なかなか攻撃しようとしないうちに陽に怒っていた。
しかし、陽は答えない。

「チツ！」

舌打ちをしながら、馬超は一気に距離を詰め、急所である喉元を狙い突く。

その瞬間、今までにない激痛が陽の左目に走った。

中庭に二人立っている。

一方は刃を相手の喉元に突き付けており、もう一方は腕が弾かれ無防備な状態であった。

しばしの静寂のあと、一人が地面に崩れ落ちていった。

剣を落とし、左目を押さえながら。

「知らな……知っている天井だ」

何せ昨日の夜、今日の朝に見たのだから、当然である。

「あつ、起きた？ 伯母上様たち呼んでくるね！」

「あつ、ちよっ！」

馬岱の閉めた扉の音が無情に部屋に鳴り響く。

（ちよっとぐらい待ってくれても良くね？）

半ば無理矢理相手をさせらたのだから、もうちよつと労って欲しかったようだ。

闘いといえは、さっきの痛みは何なのだろうか、と陽は包帯の上から左目を撫でる。

（しかし、だ。

ちよっぴり頬が赤かったのは気のせいだろうか？）

一通り考えたが、分からぬことは分からぬ、ということでは陽は思考を投げ捨てた。

そして、先程の馬岱に対する思考を始める。

暇つぶしにもなるので、考えることは好きなのだ。

その後、すぐにいつもの四人でやってくる。

そんなに暇なのか、と思わせる出現率だ。

「陽、アナタの武、凄かったわ。その後すぐに倒れたけど大丈夫かしら?」

「……まあ、異常はありませんね」

「本当にお主、剣を振るったことも、持ったこともないのか?」

「……ありません。嘘を言っても仕方ありませんし」

「本当に初心者に負けたのか……」

質問に簡単に答えていく。

若干項垂れている馬超を、陽は気にしないことにした。

「それで、提案なんだけど。……うちにこない?」

「はあ?」

「うちで働いてみないかってこやつは聞いているのじゃ」

「はあ……」

(コイツ、馬鹿だろ)

若干驚き、そして呆れる陽。

予想外の勧誘に、ついつい余計なことを考えてしまう。

「なんだったら、家族にならない？」

満面の笑みを浮かべる馬騰。

「「「「はあ!？」」」」

そんな話を聞いていない四人は、満場一致の驚愕だった。

この時のことを、陽は親友に語る。

「あれは俺の人生の中で二番目に驚いたことだった。一番は、お前に会ったことだがな」と

第三話（後書き）

自己紹介が二話目で、とかw

第四話

「……朝、か」

隙間から僅かばかり入ってくる光に、陽は目を覚ます。

その光が疎ましいと思わなかった日はない。

陽は物心つく前から朝が苦手、否嫌いだった。

また明くる日が来たという合図であり、自らの持つ真名と同じ字を持つ、太陽が何よりも嫌いだからであった。

まだ醜態を晒して生きているのか、と問われている気がして。

自らの真名と比較され、見下されているような気がして。

「戯言だな」

毎朝やってくる嫌悪感を振り払い扉に手をかけて引く。

さすがに1週間前と同じ過ちは犯さないさ、と心で呟きながら部屋から出る。

日課となった剣の鍛練をするために中庭にやってきた陽。

朝の運動にはもってこいであった。

いつも通り——剣の重さと長さに違和感を覚えながらも——ゆっくりと振るってゆく。

自らの記憶を掘り起こすかのように。
剣を振るった記憶などないはずなのに。

（にしても、馬超強えよなあ。
どこからあんな力が女の身体から湧くんですか、っと）

思わず思考してしまう。

馬超との闘いはほぼ全て反射のように身体が動いており、初闘時に勝利を納められたのもカウンターが反射的に繰り出されただけだった。

初闘時……

首への突きが左目に見えた突きと重なった瞬間、それをどう対処してきたのが、陽の封じている左目に映る。

その対処の仕方を脳で勝手に処理されたのか、身体が勝手に動く。槍の切っ先を剣の腹の側面で軌道を反らし、左足を退いて半身になり、槍に沿わせたままの剣で槍を弾き、素早く右手のみで剣を相手の首元に突き付ける、という具合だ。

実際には槍ではなく細剣？の情景が映ったのだが、応用が可能だった。

勝敗がつき緊張がぬけると、流れてきた情報の量に脳が耐えきれず、左目の痛みを伴い気を失ってしまったのであった。

（結局、あれは何だったんだ？）

そんなことを考えながら半刻ほど剣を振るっていると、後ろから声がかけられる。

「お兄様、ご飯だよ！」

馬岱が呼んでいた。

これもこの1週間で習慣になったことだった。

馬騰の家族にならないか発言の翌日に、

「お兄様って呼んでいい？」

と聞かれた陽。

早いだろう、と思いながらも悪い気はしなかったのでそう呼ばせていた。

（まあ、とりあえず飯だな）

そう思い、馬岱の方に向かった。

朝食後、陽は城の一番高いところに来ていた。

馬鹿は高いところが好き、と言っがそうだった所以ではない。

生憎、陽は馬鹿ではない。

多分、そう、めいびー。

というより、抜けていると言った方が適切であろう。

「今日で1週間だな」

馬騰の問題発言についてを思う。

完全に思考がストップし戸惑っていると。

「とりあえず今は保留ってことでいいわね？ 2週間……いや、1週間ね。1週間あげるから考えて置いてね」

と、勝手に決められていくが、有無を言わせない笑顔にコックリと頷いてしまったのだった。

（あれはなかなか怖かったなあ）

縁に足を外に投げ出して座り、そう小さく呟く。
そして、頭に両肩、腿など計五羽の鳥を留まらせながら思考に耽る。
はたから見れば、なんともコミカルな絵図である。

ここ1週間を振り替えると、ろくなことがない——此処に来るまでとは天と地の差がある——毎日だった、と陽は思う。

馬騰の作る飯を食って、馬超の鍛練に無理矢理駆り出され、韓遂には読み書き、ひいては兵法の勉強をさせられ、馬岱に街に連れ出され。

（……使役じゃないの馬騰だけなんだが）

でも、不思議と嫌ではない、と考える自分に困ったのも記憶に新しい。

正直に言えば、比較的に自由なのでいつでも逃げることもできたが、逃げなかった。

否、本当は逃げられなかった。

1、2日目は、ただ飯食らいが出来る、という損得勘定から。

3、4日目は、ここまで世話になったのに、という罪悪感と此処の居心地の良さから。

5、6日目は、どうしてここまで待遇が良いのか、という懐疑心から。

何故、俺を家族にしたいのか。

ふんべつ
分別出来ない。

何故、俺を家族にする必要があるのか。

理解出来ない。

本当に俺が家族になっても良いのか。

判断出来ない。

わからない、分らない、解らない、判らない、ワカラナイ。

いくら考えても答えが弾き出されない。

（陽、たしか15歳！

六日過ぎたころかな、イライラする！)

ボケたところで、このイライラはなくならなかった。

突然に、理由もわからず優しくされたことと1週間待つと言われてはいたが、普通ではあり得ない待遇に、陽の中で戸惑いと疑問が生まれる。

疑問はいつしか疑念に変わっていく。
心に巢食う闇がそうさせた。

しかし、先の四人と過ごすときは払拭される。
だが、また独りになると、そういう黒い感情が湧き出てくる。
そんなコロコロと変わる自分に、苛立ちを覚えていた。

気付けば、いつの間にか鳥たちはいなくなっていた。
飛び立ていったことに気付かぬほど深く思考していたのか。
はたまた、暗い思考していることを感じとり、恐れ逃げてしまったのか。

「どっちでもいいか」

八つ当たりの対象にしないで済むなら。

それ程、動物たちは傷つけなくなかったのだ。

それ以降の思考を打ち切り、陽は寝入ることにした。
呼ばれているような気がしたが無視することにした

「お兄様あゝ」

かなりの声量をあげ、自らの義兄になるやもしれぬ人を探す。
太陽も天高く昇り、いわゆるお昼時であった。

「いつもは、たんぼばやお姉様、伯母上様、薊様の誰かと一緒にいるはずなんだけどなあ」

そう呟きながら城内を歩く。

辺りを見回してはまた次へ、と結構必死な彼女の名を、馬岱という。
どうして探しているか、と問われたら、陽を昼食に誘う為である。
が、なかなか見つからない。

……この時点で既に城の上にいる陽に、気付けるはずもなかった。

「仕方ないのかなあ？」

（今日、だもんね）

小さく溜め息を吐く馬岱。

義兄になつてくれるのか、もしくは友達、悪ければ赤の他人になつてしまうのか。

それを決めるのが、今日だ。

馬岱としては、本当はいて欲しいと思っている。

強さに対する尊敬と、何故だかわからない絶対の安心感。

それが、離れたくない理由だ。

しかし、それは兄と呼ぶ陽が決めること。

自身が口出ししていいことじゃないと分かっている。

それが、すこしだけ齒痒い。

「ここにいたい！って思ってくれるように手は尽くしてきたつもりだけだなあ……」

正直、馬岱ら四人の行動に対し、陽はうつとおしいと思っていた。しかし、呆れか諦めか、はたまた違う感情か。こんなのも悪くないと思い直している。

馬岱の強引な行動は、かなり良い方に傾いていた。

「蒲公英」

自分と呼ぶ声が聞こえ、後ろを振り向く馬岱。声の主は伯母の馬騰だった。

「今日はそつとしといてあげなさい」

「でも……」

「蒲公英は、やれるべきことはやったんでしょ？」

「それは勿論だけど……」

馬騰の言葉に目を伏せる馬岱。

そこにどれほどの気持ちがあるのかを推し量れた馬騰は、安心させるように笑む。

「だったら待つだけしかないわ。それに多分大丈夫よ」

「ホントに？」

「ええ、私に任せなさい！　だから、昼飯食べなさい、冷めてしま
うわ」

「うん」

どこからその自信が来るのかは分からないが、伯母の言に従う馬岱
だった。

馬超は中庭にやってきていた。

無論、鍛練の為である。

自らの愛槍――銀閃――を振るってゆく。

目前には、最近鍛練に付き合わせた男の姿はない。

また誘おうと思ったが、母様と薊さんに止められたのでやめていた。

「母上や薊さんとは違った強さなんだよなあ」

思わず呟く馬超。

ここ一週間何度も闘い、勝ってはいるが、体力的なことではしかな
く、まだ一本も取れていなかった。

負ける気はしないのだが勝てない、という不思議な感覚を覚える馬
超だった。

「まだまだあたしは強くないと。アイツから完璧な勝利を得る
為にな！」

それを為すにも居て貰いたいんだけど、と結構私欲の傾向は強いものの、残って貰いたいという気持ちはあったようだった。

政務をそこそこに、窓縁に右膝を立てて横向きに座り、外を眺めながらちびちびと酒を飲む妙齡の女性がいた。
韓遂である。

昨日まで、毎日一刻ほど座らせ、勉強させていた机を見やる。
そこに、だらけながらも指示したところまできちんとやる男はいない。

「一体、何を考えているのかのお？」

それは馬騰に問うたのか、はたまた陽になのか。
あるいはどちらにもか。

どちらにせよ、此処にいない存在から答えが返ってくるはずなどなかった。

「才を無駄にしないためにも、此方にいて欲しいが、……何とも言えん危うさも持ち合わせておるからう。……困ったもんじゃ」

思わず溜め息め息が漏れる。

字が読め、かつ勉強させた時、驚くほど速く吸収していく陽の才を潰すには惜しいと思っていた。

しかし、人生経験豊富である韓遂は、陽の心の闇に気付いていた。
その為、どっち付かずの状態であった。

「それに、よく似ておる……。それが所為か、義姉上よ」

思いを馳せるは今は遠き人。

空を見上げれば、厚い雲に覆われていた。

「嵐の予感じゃな」

もう一度溜め息を吐いた

「あーあ、昼食い損ねた」

此処にも溜め息を吐く者がいた。

三刻ほど寝ていたであろう陽である。

「さてさて、時間かな」

そう呟いて城を降りていった。

待ち受けるは波乱と知らずに。

この時のことを陽は語る。

「これはあんまり思い出したくない記憶だなあ」

と

第五話

S i d e 韓 遂

「いつまで続くのじゃ、この下らん言い争いは……」

かれこれ半刻ほど経っておるのに……よく続くのう。

「労働力だといって、強引に連れてかれ、働かされ！」

「強引に手をひかれ、連れてかれるなんて何時ものことだったわ……

…（嫌じゃなかったわね）」

「そのとき、俺は何度鞭でうちつけられたか！」

「私だつてあるわ、そんなことぐらい……（主に閨でね）」

「抵抗したら縄で縛られ、何日も放り出され！」

「抵抗したら、縄で縛られ……ああ……」

この1週間ではほとんど出すことのなかった感情を、これでもかと言うぐらい前に出しておる。

聞いておると、こやつの壮絶な過去がわかる。

それを似ていると言われ、相当腹が立っているようじゃな。

それはまだわからなくもないのだが。

……問題なのは牡丹じゃ！

さつきから聞いておれば、何の話をしておるのだ。
牡丹の漏らす話の内容が怪しすぎるではないか。
明らかに邪なことを考えておるじやろう。

しかしながら、いくら似ていると言えども、それを重ねて考えてしまうほど、あやつは愚かではないはずじゃ。
なんといっても、儂の義姉やってるのじゃからの。

義姉上よ……本当に一体何を考えておられるのじゃ？

ある一室で舌戦……舌戦？が半刻ほど繰り広げられていた。
対峙しているのは、言わずもがな陽と馬騰である。
陽は顔を赤らめ激昂中。

馬騰は恍惚とした表情で、両手を違う意味で赤くなった頬に手を添え、いやいやといった様子で首を振り、ほぼ自分の世界にトリップ中。

馬岱はそんな二人の間で、仲裁に入るかどうか決めあぐね——正確には隙が見当たらないため——おろおろしている。

馬超は自分の母の言っていることが違うことを意味しているように感じるが、知識として無いものがわかるはずもなく、ぼけーとして
いる。

韓遂は据えた目で馬騰を見ている。
というカオス的狀況であつた。

元々、事の発端は馬騰の一言にあつた。

曰く、「自分と似ている」と。
陽は昼間の苛立ちも相まって、冷静にはいられず、熱くなっていたのであった。

「てか、アンタ、話聞いてんのか！　っ！！」

思わず発してしまった言葉で陽は気付く。

先ほどからほぼ自分の過去の独白になっていたことに。

この台詞を言わせる為に、わざと反感を買うように立ち回り、ここまで誘導されてしまったことに。

嵌められたことに、沸々と込み上がる怒りを残っていた理性を総動員させて無理矢理押さえつけ、馬騰を睨み付けていた。

「せっかく綺麗な顔してるんだから、そんな形相しないの」

「……………」

しかめっ面で、無言を決め込む陽。

「ふむ、やっぱり似ているわ……………同じとっていいぐらい」

「——っ！！」

眉間の皺はさらに深くなり、眉も一気につり上がる

「……ざけ……なよ……………」

「え？」

「アンタと同じだと……ふざけるな！ アンタみたいな幸せ者と俺が、何が似ているだ！何が同じだ！一緒にすんじゃねえよ！」

二度も似ている、更には同じと言われ本気で腹を立てていた。

「そんなこと言っても、……本当はわかっていているでしょう。アナタと私は同じ存在……だから、アナタがそれに気付いていることくらいお見通しなのよ」

もともと、陽がこの一週間逃げなかったのは、誘いを受けたときに家族となるそれぞれの人物たちを観察し、見定める為でもあった。そして、馬騰の言う通り陽は気付いていた、いや、感じていた。馬騰のことを「自分と似たような奴」と。

しかし、それを頑なに認めることを拒んだ。認めてしまうと、自分と似た奴が自分の近くにいて、という事態に嫌悪感を感じ、そしてその事実にも劣等感も感じるからであった。

「……認めねえ。絶対認めねえ！」

そう言いながら、左目を隠す為に巻いてある包帯を取り除いていく。決定的な違いを見せつける為に。

「これがアンタとは違う理由だ！」

隠していた包帯をすべて取り去って左目を開く。
そこにあったのは……

「「……………」」「「！？」」

……瞳の黒い目だった。

瞳の色自体は別段変わった物ではなかった。
ただ、右目とは圧倒的に違っていた。

光を入れて、反射させて輝く銀色の右目。
光さえ吸い込み、輝きをみせない漆黒の左目。
片方ずつなら、何ら問題ない目。

右目と左目が相まって、初めてわかる異常。
今で言うところ、オッドアイだった。

「綺麗、だね」

馬岱が頬を朱に染めて声を洩らす。

馬騰と陽の間に居たので、一番近く、見やすい位置にいた。

「……………は？」

途端、ズキツ、と。

陽の左目に、この前以上の激痛が走った。

「綺麗な目だね」

「……………え？」

「だから、綺麗だって」

「綺麗？ ……ちょっと待ってよ。どうして？ ……こんなの、お
かしい！ この色違いの目が恐ろしくないの？ 怖くないの？ お

ぞましくないの？ 気持ち悪くないの？」

「そんなこと全く思わないね！ むしろ格好いいな、って思ってる」

「あはははっ。綺麗に続いて、格好いいだなんて……可笑しな人だね、君は。でも、ありがとう」

「へ？何が？」

「初めてなんだ……この目をそんな風に言ってくれる人」

「なんで？ こんなに綺麗なのに？」

「君は本当に可笑しくて、不思議で、変な人だね」

「変じゃないよ」

（なんだ、今は。

いつもより……鮮明すぎる。

だというのに相手の顔だけ見えない。

誰なんだろうか？）

記憶から溢れるように見えた映像のようなものに、陽は疑問を持つ。稀にこの手の夢を見るのだが、鮮明に声などを聞いた覚えはなかった。

「ちょっと、お兄様……大丈夫？」

左目を押さえて、痛みから耐えるように歯をくいしばっている陽に心配の色を見せる馬岱。

「大丈夫……だけど、なんでだ？ この色違いの目が恐ろしくねえの？ 怖くねえの？ おぞましくねえの？ 気持ち悪くねえのかよ！？」

とりあえず、さつき小さな自分が小さな少年？に言っていたことを問うた。

それに対して、馬岱は満面の笑みを浮かべ、答えた。

「ううん、全然！ むしろお兄様によく似合ってて格好いいよ！」

「そうね」

「うむ、そうじゃの」

「そうだな」

いつの間にか陽の目の前に周りこんでいた三人も、馬岱の言に同意する。

「はっ……はははっ。可笑しな人たちだ、アンタらもアイツも……格好いいだなんて。おかしい……本当に可笑的いよ」

はははっ、と愉快そうに笑い続ける陽。

両目からとめどなく流れるものを気にもとめずに。

「むうゝ！ たんぽぽたちはおかしくないよぉゝ」

当然のことを言っただけなのにおかしい、と言われたことにむくれる馬代。

「はっ、はは。はっ、はぶっ、ふぐうっ！」

「笑うなら笑う、泣くなら泣く。どっちかにしなさい」

泣き笑いをし続ける陽は、馬騰にかなり強引に抱き寄せられ、優しい手つきで頭を撫でられる。

ほぼ初めてである母のぬくもりに身を委ね、四対の優しい眼差しに見守られながら馬騰の胸の中でひとしきり泣いた。

この目のお蔭で虐げられ続けてきた苦しみが、全て涙で溢れ出した。

心の中で、この人が母なら、ここにいる人たちが家族なら、悪くないと思っただ。

ここで終われば良い話だが、それは問屋が卸さない。

「寝ちゃったわね……さて、どうしようかしら」

「牡丹よ、お主は止めて置けよ……何をするかわからんからの、ナニをするか」

「し……ないわよ、息子になったばっかなのに」

「うん？ なんじゃ、今の間は？」

「うつ……かといって薊には渡さないわよ！」

「べ、別に欲しいとは言っておらんわ！」

「ふん」

「ぐっ！」

実は別に寝ていなかったりする陽。

息を整えていただけである。

それを勘違いされ、しかもなかなかタイミングを見出だせず、さらにかんりの力で抱かれている。

遺伝というのは不思議で、馬騰と馬超の髪の色は全然違うのに、胸の発育は似ている。

母親の馬騰の母性は素晴らしいものだ。

よって、ぶっちゃけ陽は窒息しそうなのである。

しかし、馬騰と韓遂の二人はにらみ合いで気付くはずもなく。

そんな二人の様子に馬超はあたふたとしている。

（志なんてないが、半ばで死ぬのか俺は！
頼む！誰か助けてくれる奴はいないのか！）

必死にもがき、偶然、合い言葉？を強く思う。

「ここにいるぞー！」

すると、馬岱が名乗りをあげて二人のにらみ合いに参加。
陽が死にそうだ、ということを伝えにいく。
小悪魔的な笑みを携えて。

結果、助かりはした。

だが、陽に助かった気はしなかった。
何故なら、隣で妹分が寝ているのだから。

（H A H A H A！なんてこった！）

意味分らないテンションで頭を抱える陽。

救った代わりに隣で寝かせろ、と要約するとこんな感じの要求をされ、こうなった。

（こうなったら自棄だ！）

結局、馬岱を抱き枕にして寝てしまった。

正直、今の陽に家族——なっただけだが——と呼べる者のぬくもりが有り難かった。

翌日、馬岱と顔を会わせる度真っ赤にして逃げられたのは余談であるが。

陽はこの時を振り返る。

「今、俺が俺で居られるのは二人、いや家族皆のおかげだ……。本当に感謝してる」と

第六話

正式に馬家の一員になって——真名も改めて交換し合って——早一週間を過ぎたころ。

陽はまた城の上に登っていた。

前回もなのだが、どう登ったのかは触れないでおこう。

陽がわざわざここにきた理由があった。

それは、新たな悩みが浮上したからである。

陽は悩み、疑問など頭脳労働をするときは一人熟考するタイプなのだ。

故に、一人になりたいのだがこれがなかなかにして難しい。

睡眠以外、ほとんど一人でいる時間がないのである。

半分は納得できた。

何故なら自ら望んだことだったから。

しかし、もう半分はそうではない。

「母さんとの鍛練がキツイ」

陽の義母、牡丹との鍛練こそが陽の新たな悩みであり、一人でいる自由時間が出来ない理由だった。

（何故だろうか？

俺、別に頼んでないのに強制的にやらされているんだよ？）

そう考えてみたが、理由は正直わかっていた。

しかし、今一度原点に戻らないとやるせない気分になってきた陽は、振り返ることにした。

（あれは、薊さんに相談した時からだったかなあ……）

S i d e 薊

「母さんの、いえ、家族の皆に恩返し出来るぐらい役に立ちたいです」

「……は？」

「だから、兵法とか、教えてくれませんか？」

薊は耳を疑った。

あれだけやる気のなかった奴がこうまで変わり、あまつさえ教えを乞いに来るとは……。

まあ、前は無理矢理だったからの、当然とは言えるのだが。

「ちょ、あのー」

「お、おお、すまんの。うむ、心得た。……じゃが、条件が一つある」

「なんです？」

「堅つくるしい言葉使いはやめぬか。家族内での約束でもあったであらうが」

「あ、ああ、そついやそうでし……だったな。うっかりうっかり」

額を軽く叩く陽。

なんじやろつ、凄く腹立たしい。

「全く……」

「でもさ、人に頼むときは誠心誠意でするもんじゃないすか？」

「ま、まあ、それはじゃな……」

むう、言いくるめられてしもうた。

この辺りは本当に牡丹と似ているところじゃな。

まあ、この際じゃ、それは置いておこう。

「よし、では早速やろつではないか！」

「あ、無理矢理話題変えたね」

「う、うるさいわ！」

クスクスと笑っておる。

まあ、ここは年の功で抑えて……だれじゃ、儂を歳だといったのは！

「……？ まあ、頼んだ俺もあれなんだけど、積み上がった書簡の山々はどうすんの？」

「……あ」

「あつはっはっはっ。これ借りてきますね。時間が出来たらまた
お願いしますわ」

何冊か持ってでていったしまった。

笑われたのは癢に触ったが、まあ良しとしようではないか。
今はとても気分が良いからな。

何故って、牡丹に自慢出来るのじゃぞ？

フフフ……牡丹の狼狽える様子が容易に想像出来るのう♪

しかし、笑顔を見せてくれるとは……。

一昨日までの奴と同じ人間だとは到底思えんわ。

この日、薊と顔を合わせた者たちは一様に、

「韓遂様の笑みが黒い……」

と言った。

そしてその夜、案の定牡丹の、

「ななな……なんですってええええ!!」

と、某未来の特盛金髪ロールばりに狼狽した声が城内にこだました
という。

そしてその翌日、笑顔だが決して目は笑っていない母さんと出会った。

「役に立ちたいからって、薊を頼ったのね？」

「……まあ、そうだね」

なぜか薊、の部分に妙に強調させてくる。

嫌な予感はあるのだが、事実だから同意で返答した。

「何故私のところに来なかったのかしら？」

微かに額に青筋がたっているのだが、……全くもって意味がわからない。

「それはわかりきってるでしょ。母さんが太守だから遠慮しておいただけじゃん」

母さんこと馬騰は、ここ隴西の太守なのである。

蒲公英の行動から身分というか、立場的にお偉いさんだとは思っていたのだが、まさか太守とは思ってなかった。

毎日飯作って顔見せて、としてたから、どれだけ暇な役職なんだ、と思っていたんだけだな。

それを知ったのも、ここ隴西が涼州のかなり西のほうであることを聞いたのも昨日のこと。

自分自身、こんなに西に来ているとは思ってもみなかった。

「それでもよ！ まあ、それはもういいわ。……役に立ちたいのよね？」

「……まあそれは、うん」

「じゃあ、そうね槍を扱えるようになってもらっわ」

母さんは満面の笑みだったが、俺は盛大に顔がひきつっていることだろう。

「ここは西涼。漢の領土の北西端に近い位置よ。故に、主に北の匈奴と西の羌からの侵攻を防がないといけないところなの。……たとえ漢に服していても、いなくてもね」

真剣味を帯びた母さんの言葉にうん、ととりあえず首肯する。

「そして、主な戦力というと向こうも同じだけれど、騎兵なの。……ここまで言えばわかるわよね？」

「俺が戦にでるのはすでに決定事項なのね……」

「当然じゃない」

わかっていたことだが、一応、肩を竦めておく。

「もちろん、陽の剣の実力には一目置いているわ。……けれどね」

「馬上じゃ使えない、って訳ね。……ハア」

「そ、理解が速くて助かるわ」

すごく頭を抱えたい事態になってしまった。

「さて、早速始めるわよ！ 私の息子になった以上、手加減はしないわよ！」

「……政務はどうすんのさ？」

「あんなもの、薊に任せたわ！」

おいおい、本当にそれでいいのかよ。
結構やべーだろ。

つか、勉強の時間が無くなるじゃんか。

「いいのよ、二人で交代してやるから。勉強の時間は無くならないわ」

出来れば、心は読まないで欲しいんだが？

「無理　そうね、蒲公英と翠を呼んで、調練場に来なさい」

コイツ、うぜえw

な感じは本気で腹が立ったぞ、このやろつ。

三人で向かった後は、俺と蒲公英は基礎固め、翠姉——歳はさして変わらないだろうが、母さんの長女ということでごうよんでいる——は鍛え直しの猛特訓という地獄のような二刻を過ごした。

昼を挟んで、俺と蒲公英（翠姉は逃げた）は薊さんとお勉強会……というより講義？を受けた。

……それから昨日まで一週間、二人からまるで腹いせか、八つ当たりを受けているかのような怒涛の日々だった。

（つか、なんとなくすんなり頭に浮かんだが、地獄ってなんだっけ？）

そう一瞬考えたが、今浮上した疑問も、牡丹の若干正統性を持った、理不尽とも言うべき鍛練と称した暴力さえも、今の陽にはどうでも良かった。

何もかも忘れて、今はこの僅かばかりの休息を享受したいのだ。現実逃避だ！といわんばかりに、陽はふて寝した。

一刻ほど経ち、城下の騒がしさに陽は目を醒ます。人々からは、称賛の声があがっていた。

（ま、多分母さんの軍かなんかだろうさ）

心底どうでも良さそうに見下ろしていると、蒲公英が庭を駆けずり回っているのが見えた。

十中八九、自分をを探しているのだろう、と陽は思う。そういう役回りをいつも蒲公英が担っていたので、そう予想する。

（まあ、困らない程度に降りてあげますかね。困った蒲公英を見るのは楽しいんだけどさ）

若干酷いことを考えながら、陽は降りることにした。

その後、蒲公英と合流して玉座の隣の部屋に向かった。

合流時に、

「もう！ お兄様！ あんまりわかりにくいところにいかないでよね
！」

と、陽は怒られた。

高い所に隠れず居るのだから、ある意味滅茶苦茶わかりやすいのだが、城の近くからでは流石に見えないのである。

ということ、とりあえず陽は謝罪することにした。

部屋には既に翠もいた。

そのまま牡丹達が来るまで、陽、翠、蒲公英は待機するしかない。

三人が玉座に入らない……入れない理由はたった一つ。

正式な臣下ではまだないからである。

いくら君主の親類であろうが、一応は兵として段階を踏む。

家族だから、高い身分の血があるから、という理由では、この地で昇進することは不可能である。

外敵からの防衛ラインの前線である地で、そんな甘えは通用するはずがないだろう。

因みに、翠はもう軍に所属しているが、まだ玉座に入れるほどの地位ではないらしい。

それについて、聞いてみた陽。

「あんだだけ強いのに、まだ将じゃねえの？」

「お前に負けたから、下げられたんだよ！」

あともう少しだったんだからな！

と、続いて叫びながら陽を軽く殴る翠。

それは自業自得じゃね？

と思った陽だったが、言葉には出さず、理不尽な暴力を甘んじて受けることにした。

かなり痛そうだったが、こういったスキンシップが陽には嬉しかったようだ。

陽は決してMではない。

そのようなことは断じてない。

（これは大事な事である）

さらに半刻ほど経ち、牡丹、薊、そして陽の知らない二人が入ってきた。

「あつ、山百合さん、瑪瑙、おかえりなさい！」

「山百合、……お疲れ」

「……只今戻りました」

「なーんか、年下から呼び捨てってやつぱしっこないわ。それで、翠はボクに対しての労いはないのかしら？」

「うっせ！」

片膝をつき、右の手で握った左手の拳を覆っている、紫紅色の髪を後ろで一つに束ねた者。

据わった目で翠を見て腕を組んで立つ、褐色の髪をツインテールにしている者。

前者は真名を山百合、後者は瑪瑙といった。

勿論、陽は二人を知らず、二人も新たな家族が増えているなど知るよしもなく。

「こいつ誰？」

「この方はどちら様でしょうか？」

「お二方は一体誰なのですか？」

と、三者三様に質問するはめになった。

最初は瑪瑙、自然体に……いや適当に。

次は山百合、少々含みを持った笑みを浮かべて。

最後に陽、丁寧語で笑顔と言う名の仮面で覆って。

端からだど、穏やかな様子に見えるだろうが、居合わせた四人には一触即発なムードにしか見えなかった。

陽は語る。

「二人との出会いは互いに最悪な印象を持ってたなあ
と」

第六話（後書き）

蒲公英√だというのに、未だ蒲公英成分が少ない、だと……！

第七話（前書き）

遅々として進まねえ……。

第七話

S i d e
陽

何とも言えない険悪なムードに、とりあえず母さんが仲立ちとして入った。

「陽。この二人は鳳徳、そして閻行。そして、山百合、瑪瑙。この子は馬白よ」

……あ、そういや俺、馬白ってんだっけ。

母さんから貰ったのは良いが、使う機会が皆無だったから忘れてた。髪が白いからって理由で名付けた——冗談らしかったが——と言ったときは流石に殺意を覚えた。

本当はきちんと問い詰めて、理由を聞いてやりたい。

けど、どうせはぐらかさるだけだろうと思ったので止めた。

まあ、こんな話、今はどうでもいいんだが。

「馬、ですか？」

「そうよ」

「……ならば。……私は鳳徳、字は令明、真名は山百合と申します。宜しくお願いいたします」

拳と掌を合わせて一礼する鳳徳さん。
律儀だねえ。

「ボクは閻行、字は彦明、閻艶なんて呼ばれたりもするわ。どれでもお好きにどうぞ」

心底どうでもよさそうな閻行さん。

難儀だねえ。

「姓名は母さん……いえ、馬騰より頂きました、馬白と申します。どうか宜しく」

相手も名乗ったことだし、とりあえず自己紹介しておく。差し障りのない笑顔でも振り撒いておこうじゃないか。

……と、なんとなく昨日のことについて回想に入ってみた。誰の為にとは聞かないでくれ。そんで、だ。

俺が鳳徳さんに持った印象は、いけ好かない人、というもの。

まあ俺の場合、含みのある奴と勘繰ろうとする奴には大抵もつ感情だが。

閻行さんに関しては、嫌な奴だ、と言うか嫌いな部類に入る奴だ、と思った。

俺などどうでもよさそうで、明らかに差別的、侮蔑的な目で見ていた。

散々そういう目で見られていたので、別に表に露にするほどの怒りは感じねえし、俺はそんなに愚かでもねえ。

どんな感情も笑顔で全て包み隠す。

それが、この腐った世を生き抜く為に必要なモノなのさ。

なにに対して持論を語ってんだか、俺は。

そんなことはさておいて。

多分、俺が持つて印象と同じように思っている二人だろうが、なるべく仲良くしなくちゃならない。

「だって、家族だかな」

これは母さんの受け売り。

家族は大切な存在よ、と再三言われているもんで染み着いた。

それに救われた俺自身、余程の事がない限り染み抜きはしないだろうし、出来もしないだろう——主に母さんの所為で。

まあ、黒に垂れ、じわりと広がる白を、染みと言うかは定かではないけど。

そんなことを考えながら、朝日の光も射し込まない中庭で拳を振るう陽。

誰かに教わった訳ではなく、見よう見まねで覚えたので我流の拳法であるが。

これも二日に一回の日課だったりする。

何故早朝、それも日の昇っていないときにやるかというと時間が無いのもあるが、何より見せ物ではないからであった。

その後日が昇る頃には、剣の鍛練、朝食を挟んで槍の鍛練へと続く。

（そついや、今日から槍の基礎から基本に移るって言うてたっけ）

と、陽は呟く。

なんにせよ、面倒な母との鍛練があるという事実には、陽は嘆息したかった。

（つと、違うことを考えている場合じゃなかったなあ）

自らに言い聞かせ、強制的に思考を修正する陽。

鍛練のことも大変悩ましいが、二人との距離の詰め方の方が今は大切だ、と考えた為だ。

（さてはて、何日かかるんだろうかねえ？）

これからを考え、小さく息を吐いた。

延々と考えているうちに日は昇り。

さらに剣を振るって半刻たち、蒲公英がやってくる。

「なあ蒲公英……どうしやいいと思う？」

「なにが？」

中庭から部屋に戻るとき、陽は蒲公英に相談してみることにした。そついや主語が抜けてたなあ、と思いつつ、二人の事を聞いてみた。

「山百合さんは、寡黙な人だから積極的に話してみた方がいいと思うよ！ 蒲公英たちがお兄様にしたようにね」

（あそこまでやられると多分きついと思うんだが）

四人で、弓兵が間断なく放つ矢のように自分のところに来られたのは本気で鬱陶しかった——しかしながら、途中からは若干嬉しくなっていたが——ので、そこまではやろうとは思わないが、参考にすることにした。

「んで、閻行さんは？」

「んー……、わかんない」

思わずずっとこけそうになる陽。

最初は何でも聞いて、みたいな自信のある態度だったのに、分からないとあっけらかんと言われたら、そうなるのも無理はないだろう。

（しかし、思案するときの行動がいちいち可愛いなあ）

今も口元を人差し指で押さえ、首を傾げる姿になんともいえなくなる陽。

「お兄様？」

「……っ!？」

惚けてていた陽を心配になったか、蒲公英は顔を覗きこむ。

いきなりのことには、ドキッとする陽。

（まったく、不意打ちなんだってばさ！）

「どうかしたの？」

「……何でもない」

「ふん。あつ、瑪瑙のことは薊さんに聞くといいよ」

「何故に？」

「瑪瑙は薊さんの娘だからだよ。……義理の、だけれど」

確かに仲がいいな、と思う節もあったがそういうことだったのね、と陽は思った。

そうこうしているうちに、部屋につく。

どうやら陽と蒲公英が最後であった。

陽は静かに謝罪の意で一礼してから席につき、蒲公英は陽のそんな様子に首を傾げながらも席についた。

「皆揃ったわね」では、頂きます！」

「」「」「」「」「」「」「」「」

朝と夕は可能であるなら、なるべく家族皆で食事をする事。
食事初めと終わりは声を揃えて挨拶をすること。
この二つは、牡丹がつくった家族間のルール……鉄則、掟と言っ
ても過言ではないものだった。

S i d e
陽

「「「「「「馳走様でした」「」「」「」

「はい、お粗末様でした♪」

食事は滞りなく終わった。

昨日の夜と合わせて、二度目の家族全員での会食。

昨日は全く口を開かなかったけど、今日も、とは流石にいかないの
か振ってきたので、不躰にならない程度に答えておいた。

「そうそう、今日は時間ができないから、三人は山百合から指南を
受けること。いいわね？」

「うげっ！ 山百合のかよ」

「……翠様、それは挑発と受け取らせて頂いても宜しいでしょうか
？」

「うっ！ ううう、陽！」

翠姉が最初に目についたのが俺のようであるが、我、関せずを決め

込むぜ。

俺には関係ねえし。

まあ、とりあえず、目を明後日の方へ向けておこう。
鍛練に向かうときに殴られたのは余談である。

「さあ翠様、始めましょうか」

「なあ、山百合、朝のはだな。その、……言葉のあやつて奴でな」

「……朝の発言は関係ありません。……半分は、ですが」

中庭の真ん中には、翠姉と鳳徳さんが対峙していた。

翠姉はいつもの十文字槍を携え、鳳徳さんは双戟とでも言うのかな？
とにかく、片腕ごとに一本ずつ戟を持って自然体に構えている。
鳳徳さんを見れば見るほど感じるものは一つ。

（強い）

今まで観察していて、立ち振舞いといい、纏う雰囲気といい、そして今の構える姿といい、半端じゃないと思った。

翠姉……御愁傷様です。

S i d e 三人称

陽が翠に対して合掌した直後に戦局は動いた。

翠から、先ずは一突きと言わんばかりに、鳳徳の心の臓を神速とは言えないものの、それなりに速い速度で突く。

そんな一撃を、両腕の戟を胸の前でクロスし、いとも簡単に防ぐ。母さんとの1週間の鍛練でここまで変わるのか、と陽が思うほどの重さと速さの一撃を、である

「……翠様、お強くなりましたね。ですが——「うわっ!」——まだ踏み込みが甘いですよ」

たった一撃で、鳳徳も翠の目まぐるしい成長に気付いたようだ。

しかし、簡単には褒めることはせず、更なる力で叩く。

変な自信をつけさせない、傲らせないためである。

ムチが圧倒的に多い、アメとムチの鍛練が鳳徳独特のスタイルである。

その為、白馬の女王様とか氷帝などといった二つ名があったりするとかしないとか。

S i d e
陽

半刻後、翠姉の番は終わった。

相当叩かれたようで、真っ白に燃え尽きていた。

おてての皺と皺をあわせて、南〰無〰。

「死んでない!」

俺ですら元ネタが正直わかってないのにさ、よくツッコめるよねえ。
こういう場面で使うということだけはなんとなく覚えてたけどな。
ん、間違ってるって？

……………しらんがな。

俺の変な記憶にいえや。

「誰と話してるの？」

蒲公英さんや……………ヤバい奴見るような目はマジで勘弁してください、
俺の心はガラスでできています。

あれ、ガラスって何？

またか、俺の変な記憶！！

このままじゃ無限ループになり……………ループってなんだあああ！

自爆して、突然頭をぐしゃぐしゃに掻き回す俺を、蒲公英と鳳徳さ
んはひいていたが。

他人なんざ構うものか！

冷静さを取り戻した俺は、楽しい楽しい独り言（泣）を終わらせ、
鳳徳さんの向かいに立った、否、立たされた。
いやいやいや、まだ基礎習ったばかりですよ。
なんでいきなり実践形式！？

と、いろいろ考えながらも表情には出さないが。
ひとえに、人間の学習能力の賜物と言えよう。

「……………では、きてください」

「……ハア」

あんまり乗り気にならないんだけどね……正直面倒だしな。

俺は基礎に習った通りに槍を振っていく。

突き、払い、降り下ろし、このみっちり教わった三つで、相手の急所、鳳徳さんがわざと作っているであろう隙を的確についていく。

「……これならば問題ないですね」

小さく呟く鳳徳さん。

何故だろう、凄く嫌な予感がある……。

鍛練は終わり、昼は適当に食事をすませる。

今はお勉強の時間になるまでのちょっとした休憩。

そういえば蒲公英は、槍の扱いはまだまだが筋はいい、と鳳徳さんに言われていた。

そのことが良かったか悪かったかは、これからの時代と自分自身の受け取り方次第だけだな。

なんとなく、隣にいる蒲公英の頭を撫でてやる。

ちよつとだけ困った顔をして俺を見上げた後、すぐに笑顔になってくれる。

やっぱり、可愛いな。

乱世の最中でも、この笑顔は無くしたくねえよなあ、と漠然と思った。

陽は語る。

「蒲公英に特別な感情を抱いたのは、突き詰めればこの頃からかも知れないなあ」と

第八話（前書き）

まだまだ進まない。
ほのぼのが続くぜ！

第八話

「陽、軍に入りなさい」

「俺、まだ槍術基本。おk？ 軍？ は、問題外」

「却下。師たる私が良いというのだから良いのよ」

「却下は却下だぜ。足引つ張るだけだかな」

「却下の却下は却下。想定内よ、それは。元から協調性がないことぐらい分かってるから」

「却下の却下の——「ええい、喧しい！ 却下却下五月蠅いわ！」
——ぬう」

陽の勘は当たってしまった。

いつも通り家族全員で食事を済ませたときに陽は牡丹から通達された。

反論は勿論したが、それも悉く返されてしまい。

陽が折れることで、話は収束した。

陽は盛大に頂垂れていたが。

S i d e 牡丹

元々、山百合たちが帰ってきたら、陽を山百合の率いる部隊に入れることは決めていたんだけどね。

もう少し羌の討伐には時間がかかると思っていたし、陽を鍛えるのにもまだかかるだろうと思っていたのに。

それを山百合が認める程に成長してるなんてね。

…… ホント、良い意味で裏切ってくれるわ。

全く、流石私の自慢の息子、としか言いようがないわね ♪

「あ、そだ、あれも陽に任せようかしら……」

この私でも出来なかったんだもの、一筋縄ではいかないと思うけれど。

ま、山百合を認めさせるなんてもっと至難の業なんだけだね ♪

「陽 ♪ ちよつとおいで！」

顔がひきつっているわ。

全く、失礼しちゃうじゃない ♪

S i d e ???

俺は元々、三流とも言えないほどのクズに飼われていた。

そいつは気が短く、気に入らないことがあれば直ぐに他に当たり散

らし、気に入らない奴がいれば殴り、なぶり、そして棄てた。
そんな奴が、俺にだけは決して何もしようとしなかった。
むしろ、可愛がった。

俺がどんなに拒もうとも、へりくだり、貢ぎ、俺に必死で気に入られようとしていた。

俺は世間から賢いと言われている。

他の奴らに劣る気も、引けをとる気もさらさらない。

だからこそ気に入られた。

……願ってもいないクズに。

気持ち悪い！

クズが俺に触れてくれるな！

幾度も、幾日も、幾月もそう思っていた。

そしてそれと同じ回数だけ嘆いた。

何故俺だけ違う！

頼むから解放してくれよ！

と、何度も何度も。

さらに、現実には甘くなかった。

……何故お前だけ。

……お前だけが幸せで。

……お前だけ愛されて。

そんな敵意の籠った目で見られるようになった。

違う！

俺は奴なんかには愛されたくない！

俺はこんなところで生きていたくななどない！

と、何度も叫んだ。

しかし、そんな声が届くはずもなかった。

だから、俺は逃げた。

数日数週間かけて、繋がれた縄を食いちぎって。

幸いにも俺は脚が速い。

振り切ることなど容易かった。

だが、外を知らなかった俺は懸けて、賭けて、駆けるしかなかった。それが一番身を守ることに繋がることぐらいは知っていた。

だがそれも、長くは続かなかった。

疲労の蓄積と満足でない食事は、徐々に身体を蝕んだ。

そして俺は、崩れ落ちるような感覚に陥った。

……その朦朧とした最中で人影を見たのは、何故かはっきりと覚えていた。

どれ程の時間が流れたのだろうか。

俺は人の膝に頭を預けていた。

何故だか不思議と心地がよかった。

「ほれ、やるよ」

今日は朝から何も食べていなかったの、一心不乱に食べてしまった。

あ、あゝ、俺のがあゝ、という嘆きの声には少し罪悪感を感じた。まあ、仕方ねえなあ、と呟いた後で。

「ちょっとここを深く入ったところに水場があるから、後でいけよな」

と、優しく撫でながらそう言ってくれた。

新天地で、あのクズでない人に優しく、慈しむように見てくれるその銀の隻眼が無性に嬉しかった。

「さてと、そろそろいくわ。ま、ちゃんと休むこつたな。……そんなじゃ、達者でなあ」

と言って、行ってしまわれた。

この恩は決して忘れない、と心に刻みこんでおいた。

ふと思えば。

こんなに短時間しか一緒にいなかったのに、もう寂しいと感じてしまっていた。

………ついでに行きたい。

そう思った。

だが、それを俺自身が許さなかった。

動けないのがこんなにももどかしいと感じたのは、初めてかもしれない。

しかし、”主”からの初の命令、ちゃんと休め………こう考えると自然と嬉しくなった。

（未来の我が主よ………再び相見えんことを）

俺は天を仰ぎ見た。

それから、目的をもって走るようになった。
我が主を求め、ひたすらに走った。
そうしたら、ある軍に遭遇してしまった。

「なんだ、こいつ？」

「……さあ」

「十分な体調じゃないようね。……母様たちに任せます？」

「……それが最善でしょう」

抵抗はしてみたものの、弱りきっていた身体には酷なことだった。

そして、今、俺は保護という形でここにいる。

最初、俺には捕らわれている、という風にしか感じられなかった。

一刻も早く主に会いたいのになんとかここで立ち止まっている暇などない！

ここから早くだせ！

我が魂の叫びを聞け！

そう、ずっと思っていた。

だから暴れたりもした。

「誰かが、誰かが私を呼んでいる！」

そこに、まさか反応する奴がいるとは思っていなかった。

「安心なさい♪ 捕らえる気なんてないわ。……あなたみたいな
い子には是非ともいて欲しいのだけれどね」

そう言つて、撫でてくれた。

主並の心地良さがあつた。

主に似ている、と感じた所為なのかは分からないが。

「心に想い人がいるようね。……まあ、簡単には諦めないわよ♪」

主を見つけていなかったら、この人を主だとしていたかもしれない。
不覚にもそう思ってしまった。

だから、少しの間だけ留まってみようと思った。

その判断は間違っていなかったと証明される日がこんなに早くやつて来るとは思ってもみなかった。

S i d e
陽

「だから、痛いっての!」

耳引つ張られるとか、尋常じゃないです、はい。

心底嫌そうな顔をしたのが気に入らなかったらしい。

そんなこと言っただけじゃないじゃないか！

だってどうせ面倒事なもの。

「ほら、ついた。ちょっと待ってなさい」

俺と母さんと蒲公英と鳳徳さんは、ある小屋のそばにある広場に来ていた。

正確には、俺だけ耳を引つ張られ、連れて来させられたんだがな。

鳳徳さんは保護した責任者として、蒲公英は暇潰しと興味本意でついてきていた。

そして母さんがその小屋へ向かい、俺たち三人は待つことにした。

……因みに、俺と鳳徳さんの間の険悪なムード(?)は、鳳徳さんがある程度認めてくれたことで払拭されたさ。

しかしながら、まだどこちない感じだから、どちらから口を開く、というのではないけどな。

そうこうしてる内に、母さんがとある馬を引き連れてくる。

あれ、あいつは……。

「……あの馬鹿馬か？」

「ほえ？ 馬は馬鹿じゃないよ！」

「それは知ってる。……知ってるけどさ、俺を生命の危機に追いやった奴を馬鹿と呼ばずしてなんと呼ぶ！」

「生命の危機？ …… ああゝ！ じゃあ、あの子がお兄様の食料を？」

「まっ、そゆこつたな」

でも食料がなくなってなかったら、森に入る必要もなかったからなあ。

…… だったら全ての始まりはあいつとの出会いからなのかもしれない。

感謝すべきかねえ？

「あつ、ちよつと待ちなさい！」

母さんの声が聞こえたと思ったら、すげえ速さで走ってくる奴がいる。

まあ、あの馬鹿馬だけど。

いや、待て。

…… その速度でこつち来んの？

止まるどころか、さらに速度あがってますよ？

流石にあせるぞ？

待て待て待て、ぶつかるときのエネルギーって半端ねえんだぞ！

速度は2乗するんだぞ！

とっさに思い出したやつは知らんが…… 俺、確実に死ぬぞ！

「ちよつ、とま—— ひでぶっ！！」

ちよ、視界が、グルグル、回ってるな。

ああ、これが、フィギュアスケートのジャンプしてる人の気持ちな

んだろうか。

そろそろ現実逃避はやめ——！
ぐべっはあっ！！！！

地面に叩きつけられる俺。

「いつでえええええ！！」

無茶苦茶痛え。

あれ、ちよつと待てよ。

……（身体を確認中）。

馬鹿な！なんともないだと！

骨折ぐらいあつて然るべきな衝撃だったぞ！

こっ、これがギャグ補正と言っやつなのか！

……何も言っな、俺が一番わかっているから。

そんなことよりさあ……。

「つか、何で頭突き！？ お前は恩を仇で返すのか！」

ブルツ、と鳴いた。

（そんな気はなかった）

とのことらしい。

え、何でわかるかって？

俺は動物たちの気持ちはなんとなくだがくみ取れるんだよ。

ずっと動物だけが友達のボツチだったからな。

「ふうん、想い人って陽のことだったの」

「想い人ってなんだよ、気持ち悪い。……こいつオスだぞ？」

何時の間にか近くにいた母さんが、変なことを呟く。

生物としての壁を超えさせるだけでなく、男色に靡けというか、この母親は。

「何を馬鹿なことを考えてるかは知らないけど。背を預ける主という意味よ」

「……主い？　ちよつとさ、話の飛躍度が半端じゃないんだけど」

「その子に聞いた方が早いと思うのだけど？」

「確かに」

……いや、馬と会話できるのが当然、みたいなこのやりとり、頭おかしいだろ。

まあいいけど。

とりあえず、聞いてみた。

「それで。どうして俺が主？」

（貴方は命の恩人だ。それに、俺は貴方に惚れた。だから、俺の背を貴方に預けたい。駄目だろうか？）

「惚れた、て……。まあ、いいか。これから戦場に出ることになる

だろうが、宜しく頼むぞ」

ブルッ！（おうさー！）

俺が応えてやれば、ここの一番の大きな返事をする。
つか、そんなに嬉しいのかよ。

「……この子の名前はとうするのですか？」

……ここに来て、初めて口開いたな、鳳徳さん。
まあ、問題ないけどさ。

「うーん？」

どうしようか。

漆黒の毛……なんつか、記憶の片隅にある黒。号ってやつより細いしなあ。

脚はかなり速く、立派なたてがみ。

……カスケ。ド？

うん、何故だかわからんが凄くしっくりくる。

しかし、そのまま使ったらいかん気がしてならない。

うむむ、どうしよう。

ま、ここは無難にいくか。

「毛が黒で、兎のように脚が速いから、今日からお前は黒兎だ！」

赤兎馬って、こんな感じで名前つけられた、って聞いたことがある。
我ながらかなり適当だが、喜んでいようだし、まあいいか。

「一筋縄でいってしまったわね。……つまんない」

母さんがふざけたことぬかしてやがったが、ここは抑えてやろう。

戦場の苦楽を共にする、人馬の主従はこんな出会いだった。

陽は語る。

「黒兎は俺の最高のパートナーだな。……しかし、カスコードって
呼びたいな」
と

第九話（前書き）

今更ですが。

鳳徳の鳳は本来、广に龍です。

でも、ひなりんもこの鳳だし、いいか、みたいな考えです。

第九話

「えーと、私は武官として山百合さんの部隊に入る予定だったと思うんですけど？」

「そうよ」

困惑した様子で質問する者に、淡々と答える。
質問者を見る素振りもない。

「じゃあ、何故太守お側仕え兼侍女みたいなことをさせられているのでしょうか？」

「侍らせておきたいから？」

「何故に疑問形ですか……。で、最も聞きたいのは、この名札の置かれた机と、そびえたつ書簡の山はなんなのですか!？」

「貴方専用の机と、仕事だけど」

「見りやわかるわ! じゃなくて、どうして文官みたいなことをさせられそうになっているのかを問うているんです!」

困惑から怒りに一瞬変えるが、それを無理矢理抑えて、あくまで丁寧語で書簡の山を指差して問い詰める。

それに答える者は、満面の笑みを浮かべ、親指をグッと上げてみせた。

「貴方が文官候補だからよ」

「その幻想をぶち壊す！」

書簡の山にパンチする。

勿論の如く、大きな音をたてて崩れさった。

「あ、自分で倒したたのは自分で責任持って片付けてね」

「ち、ちくしょおおお！！」

今にも泣き出しそうな声色で、しぶしぶ山を積み直し始めた。

今までの一連の流れを演じたのは、言わずもがな陽と牡丹である。

いつも、暇な時間は侍女紛いなことをやらされていた陽であったが、今日初めて牡丹の政務室に來ると、昨日までなかった自分の名入りの机に気付いた。

かねてからの疑問であったこと——何故侍女紛いをやらされていたのか——を共に聞いてみれば。

なんということでしょう、自分の知らないところで役職が増えていくではありませんか。

陽はそんな状況を打開する一手を打とうとしたのだが、あっさり返された為、惨めに片付けをしているのであった。

S i d e
陽

どうしてこうなった！！

何時の間に文官候補になったんだよ。

何時もの一連の流れは。

母さんのお茶を淹れて、母さんからの質問に適当に答えて、ただそれだけの……あつ。

……思い返してみれば、母さんは政治的な質問しかしていなかったっけ。

さらに、たまに書簡まで見せて聞いてきたこともあったような……。

……。

………うん、俺か。

そつ、それでも一言あるってmondしょ、普通！

「どうせひと悶着あるのだから早いとこ終わらせたかったのよ」

だから心を――

「それに、解るでしょ？　うちは文官が少ないのよ。……一人でも多く良い人材を集めるのが、太守の務めではなくて？」

――ぐうの音もでません。

流石と言つべきなのか、何と言つべきか。

……真面目な母さんに感服したぜ。

「ほらっ、ぼーっと突っ立ってる暇なんてないわよ！」

「うい、了解」

丁寧語は、まあいいか。

S i d e 三人称

（面倒くさがりだけど、根は素直なのよね）

黙って席に付いて、仕事を始めだす陽を見て、牡丹は思う。
だからこそ、有無を言わせないように言いくるめたのだが。
その行為が、陽を騙しているようで牡丹は心が痛かった。

しかし、自分は太守。

私情をはさんだ事を言っではいられない。

文官の数が少ないことは、死活問題だからだ。

（陽はいろいろな面で頭が回るから、きっと解ってくれる……。解
って、くれるっ）

だがやはり、内心ではとても歯噛みしたい気持ちだった。

無理矢理に自分に納得させようと言い聞かせても、やはり葛藤は避
けられないのだ。

牡丹という女は、どうしようもなく母親だった。

（それにしても、さっきの陽の呆け様はなんだったのかしら？）

嫌なことをこれ以上考えることを止め、ふと思ったことを心で呟く。

（ふふっ、もしかして、母さんに惚れてたり……？

まあ、冗談か冗談じゃないかは別にして、もっと母さんのかっこい
いとこ見せちゃおうかな♪）

牡丹はそれ以上の思考を切り上げ、政務モードの頭に切り替える。
そんな母親の空気の変化を横目で見た陽は、一層真剣に取り組むこ
とにした。

二人が没頭すると、そこには、さらさら、と筆を走らせる音と、時折書簡を積む音だけがするという、異常な空間が形成されていた。後々聞けば、二人のとてもない集中力に、侍女たちだけでなく、他の文官たちも入るのをためらったという。

S i d e
陽

二刻後、そんなはりつめた空気が霧散する。

「「おつ、終わったあー!!」」

いやゝ、やっと終わった。

俺は一山、母さんは三山……とんでもねえです。

いや、初めてだよ!?

かなりの健闘はしたと自分でも思っただけ!

すげえ集中力だったと自分で褒めてあげたい勢いなんです。にしても、大分時間経った気がする。

その証拠にほら、日が傾いてきて……あゝっ。

「あ、ああああー!!」

そつえば、本日、山百合さんの部隊の召集がかかってたっけか……!!

せつかく、最近改めて真名の交換をしたというのに、速攻で信用がた落ち。

……オワタ(´・ω・`)

駄目だ鬱だ死の――

……いや、こんな弱気でどうする！

正当な理由があったのだ！

これを使わない手はない！

俺は、断固として戦うぜ！

さて、と。

……死地に赴くか。

横目で見えた母さんが、どこか笑っているように見えたのは気のせいだろう。

修練場に来ると、たくさんの兵隊さんがいました。

こんなかにはいるのか。

……やだなあ、出来なくはないけど、集団行動とか苦手なんだよなあ、俺。

そんなことを思いながら歩いていると、真打ちが登場した（汗）
いやまあ、ずっと正面にいたんだけどさ。

「……これはこれは一刻ほど前の召集に応じずそのくせそのまた一刻後に急ぐ素振りもなく平然とやって来られる胆力の持ち主の馬白様ではありませんか」

「すみませんしたー！！！」

普段の寡黙さに背反して、息継ぎなしで皮肉る山百合さんに恐れをなした俺は、その場で土下座をし、頭を垂れる。
普段はお淑やかな人がキレると怖いってよくあるよね。

（因みに。

陽が起立状態から土下座までの時間は、約0.5秒。

土下座に入るスピードにタイムレコードをつけるとしたならば、今のところ、1〜10位まで全て陽の名で埋まることとなる。

そう今のところは、だ。

この後に、自分より素早い土下座をこなす君主が現れることなど、陽は思ってもみなかった。

……思っていたら逆に凄いが）

閑話休題

言い訳もなく、誇りもなく、さりとて臆面もなく。

それが俺が土下座する時の三大信条さっ！

いや、表に出さないだけで、バリバリにびびってます、はい。
そんな俺に何を思ったか、一つ爆弾を落とした。

「……いいですよ、牡丹様から通達はでていましたから」

……。

………えっ？

………ふう。

オーケー、もちつけ、俺。

よし、深呼吸だ。

吸って、吸って、吸って……。

「な、ななな、なんですとおー！！ 土下座の意味ねーじゃん！
なんで怒ってます雰囲気醸し出してたかな！？ チクシヨオオオオ
！！ だから母さん笑ってやいがったのかああ！！」

はい、一気に吐き出す！

この、やり場のない感情に、頭を抱えて、かぶり振ってしまった。
周りから見ればとても痛い人に見えるだろうが、気にしねえ。

……完ッ全に騙された……！

怒りよりも脱力感が半端ねえ。

騙された自分に溜め息が自然にでるぜ。

これを考えたのは山百合さんじゃなくて、あんのどアホ母親だろう。
野郎じゃねえが、ざけんな、コノヤロウ！

「……ぷっ……くっく……」

っていうか、山百合さんの肩が忙しく動いている。

……笑ってる？

あの山百合さんが、か？

表情筋が本当に機能してるかわからない人が？

いや、俺の前だけ無表情なのかもしれないけどさ。

見上げつつ覗き込むと、必死に堪えようとしていながらも、笑みが
こぼしている山百合さん。

……うん。

「可愛いな」

あ、声に出してしまった。

だけど、それくらい可愛かったんだよ。
まあ、日頃の面持ちとの差、所謂ギャップ（だったか？）というものがあつたりはするが。

「……ふざけたことを言わないでください」

そう言つて、いつもの顔に戻つてしまふ。

別にふざけてる訳じゃなく、至極真面目なだけだなあ。

元々の顔立ちは、可愛いというより綺麗つて感じ。

だけど、今のちよつと幼さも残つた笑顔には可愛さがあつた、いや、ホントに。

「……本日あなたのやることはありませんですがしっかり見ておくように」

まるで逃げるように、兵たちに号令をかけにいつてしまった。

あらら、残念。

まあしかし、貴重なものが見れたな。

今日は慣れないこととしてとても疲れたんだ……役得として貰つぐらいいいだろ？

ま、答えは聞いてないけどね。

Side 山百合

牡丹様や薊様には何度も言われたことはあつた。

私の考える男、の中では、あるたった一人の男性だけ、言つて頂い

た人がいた。

自覚がありますが、元から愛想が無かつたらしく、可愛いと言ってくれたのはその三人と、変態さん達だけでした。

……綺麗だけど、可愛げないよな。

……そうだな、厳しいっつか、怖いっつか。

……冷たいんだろ。

……でも、その冷たさがまた。

他の男からは同じようなことを何度もいわれました。

流石に最後の人みたいな人たちは殴っておきました。

毎度恍惚とした表情で倒れていくので、根深く記憶に残っています。その総評により、氷帝、白馬の女王様という別名がついてしまいました（乗っている馬は白なのでわかりますが、女王というのはよくわかりません）。

ついた当初は別段気にも止めませんでした。牡丹様が「かっこいいじゃない」と言うので、今は好きだったりします。

とにかく、私の中でのたった一人の男性が亡くなって十余年、私を可愛いと言った者がいました。

新しく家族になった子です。

最初に会ったときは、少々戸惑いました。

あの方に容姿が似すぎていましたから——髪は白く、目付きは悪かったです。

だから、本能で男を嫌う瑠璃ちゃんと違って、敢えて距離をおきました。

そうして、人となりを見ようと思ったからです。

結果は、合格です。

真名のように、輝いていて、イキイキしていました。

しかし、無邪気さの中に冷徹さも垣間見えたのも確かです。

あの子の武は特殊で、冷徹さの集積といっていいほどに、目が、剣筋が、冷たかった。

そこに惹かれ、認め、そして真名の交換さえしました。

そんな子が、牡丹様の手のひらの上で面白いように踊るものだから笑ってしまいました。

そんな最中に不意に言われました——可愛い、と。

あの頃はまだ十代で、慣れない扱いに戸惑いと恥ずかしさがあつたのだと思っていました。

ですが、違いました。

慣れなどありませんでした。

柄にもなく焦りました。

とても恥ずかしかった。

でも、どこか嬉しかった。

だから、取り繕いました。

赤面していないか、それだけが心配でした。

そして、逃げました。

あれは、様々な感情からの逃避でした。

兵の指揮を名目に逃げる最中、忙しく辺りを確認しました。

逃げる私を自身で滑稽だと思いますから、見られたくありませんでしたから。

しかし、それ故に他に見ていた方の存在に気付いてしまいました。

「……………あう……………／／／／」

恥ずかしい。

顔が凄まじいほどの熱をもっているのがわかります。
結果を見るべく、策を考えた人が近くにいたことなど、考えればわかることでした。

.....。

くっ！ 陽君、許すまじ！

Side 三人称

なかなかの逆恨みもいいところなことを考えていたが、その後すぐに山百合は修練場全体に聞こえるように指示を飛ばした。

どうやら将モード切り替えることで、無事に熱を冷ませたようだ。

陽を陥れ、かつ二人の様子を伺いにきていた者、すなわち牡丹は呟いた。

「あとは、瑪瑙ね」

これがまた大変なのよねえ.....、と嘆息した。

陽は語る。

「このときから、長い間ずっと悪寒が止まらなかった」と

第十話（前書き）

基本的に地の文とかの呼称は、オリ主が真名を預けられたかどうかで変わります。

第十話

「で、なんでボクがアンタなんか指南しないといけないのよっ！」

「知りません。母さんや薊さんに言いましょう」

「アンタ、母様達を侮辱する気！」

「誰もしてませんよ……」

（凄く面倒くさいです、ありがとございました）

陽は閻行と共に、先日来た馬小屋近くの広場に向かっていた。

何故なら、閻行の言う通り、陽は馬術の指南を受ける為である。

さらに、閻行が不機嫌なものには理由があった。

それは、

「ボク、アンタのこと嫌いだから」

この一辺倒なのである。

陽と山百合、閻行が会って、そろそろ1週間が経とうとしているが、話をするまでには関係は進んではいるものの、まだまだ閻行との確執はなくなっていないかった。

話といっても先の程度。

如何に距離が縮まっていなかったのかが容易にわかることだろう。

その為、なんとか二人の関係の修復を試みようとする牡丹、薊の計画が、今回の馬術訓練に繋がるのであった。

「黒兎！」

陽は、先日愛馬になったばかりの馬である黒兎を呼ぶ。

呼び掛けに応じ、すぐさま猛然と駆けてくる黒兎。

牡丹が言つに、繋いでおくれ無駄、とのことで黒兎はほぼ自由なのである。

しかし、陽の命令によって馬小屋で大人しくしているのであった。

S i d e
陽

相変わらず速いな。

そんなことより、顔面すれすれで止まるのは止めようぜ。

マジで怖いから。

そんなことを訴えながら、首を二回ポンポン、と叩いてやる。

するとブルツ、と黒兎が鳴く。

（では、遠慮なくぶつかれと？）

と聞いてきた。

……何故にそう解釈だよ。

まあ、多分冗談だろう。

そう、思いたい。

「へえ、仲がよろしいのね。……本当にアンタには見合わない良馬ですこと」

「ですよね」

閻行さんは男を下にみる節があるっぽい。

自分より弱い癖に威張ってる奴らがいるというのが癪に障るのだろう。

まあ、その点に関しては俺には関係ないけどな。
弱くはねえし、威張ってねえ。

むしろ、下手下手に立ち回ってやってる。
でも、その姿勢が嫌いっばいから、本当にどうしようもないんだがな。

……ま、黒兎が俺に見合ってないってのも事実なんだが。

「何笑ってるの、気持ち悪い」

おもつくそひいていやがる閻行さん。

知らず知らずのうちに笑みがこぼれていたらしい。

……自分でも気持ち悪いと思ったんだから世話ねえぜ。

「とりあえず、乗りなさい」

なんて無茶ぶりだよ、おい。

ど初っぱなからなんのコツとかもなしですか!?
指南者として、それはどうさ。

「百聞は一見に如かず、よ。さつさと乗りなさい!」

なーんて高圧的なんだろうか。

残念ながら、俺は被虐趣味なんてないぞ。

むしろ、こう、なんというか。

閻行さんみたいな高圧的な奴とかだと特に――

「さつさと乗れって言うてるでしょうが!」

――屈させてやりたい。

どうやら、俺は嗜虐志向、らしい。

なんて、アホな思考をしている暇なんじゃなかった。
ったく、乗ればいいんだろ、乗れば。

馬銜と呼ばれる馬具を黒兎の口につけて乗ってみせる。

「（ふん……格好だけは一丁前ね）　しっかり内腿を使って、しめあげる気持ちで力をいれなさい！　腰掛けるようではダメよ！」

「こう、ですか？」

何故だろう、凄えしつくりくるんだが。

懐かしい、訳じゃないんだか、そんな感じ。

どうやったら上手く乗れるのか、そういうのが身体から湧き出る感じだった。

Side　三人称

「黒兎、ちよつとおもいつきり暴れてくれる？」

「ちよつと、何言つて！　……うそ……」

閻行は、暴れる黒兎の上に平然と乗り続けている陽に絶句した。

通常数カ月、下手をすると一年以上かかることを、たった1日で平気でやってのけたのだ。

驚いても無理はないだろう。

（……そつ、そうよ、黒兎つて子が手加減してるだけよ！）

だが、閻行はそのような事態を認めるのを潔しとしなかった。
いくら家族の面々が認めた奴といえど、閻行の前にいるのは、ずっ

と蔑んできた男。

簡単には認めるわけにはいかったのだ。

「いやっ、ちよっ、まっ、こくっ、止まってええええ!!」

(限度つてもんがあるだろ!)

そう心で思えば、黒兎はゆっくりと身体を動かすのを止める。
意志疎通って、素晴らしい。

(つかやっべえな、明日内腿絶対筋肉痛だな、こりゃ)

数分動いてもらったただけだが、既に脚は悲鳴を上げている。
かなりの力を使ったのだろうと思い、明日の自分の体調を心配した。
その中で、ふと思った。

(そういえば、ちょっとした助言以外、何も教えもらってないんだ
が)

しかしながら、これについては陽が悪い。

馬術に限らず、何に対しても教わる上で過程と段階がある訳だが。

陽は知らずうちにそれら全てを通り越して、最終段階までクリアしてしまっただから。

それを知らぬ陽は、さらに閻行の神経を逆撫でする。

「閻行さっくん、教育放棄しないでくださーい」

「~~~~~! ……ないわ」

「はい?」

「アンタに教えることなんて何もないわ！」

（え、帰っちまうの！？）

心底憤慨した様子で帰っていく閻行に、何か怒らすようなことしたか、などと陽は考える。

（今更存在自体に、って言われても困るけどな）

そう思いつつ、陽は黒兎をゆっくりと走るよう指示する。
人の感情の起伏にはたまに疎い陽なのであった。

場所は移つてある回廊。

S i d e 閻行

「なんなのよ、アイツ！」

なんだか無性にイライラする。

下手に出てきて、へりくだった胸くそ悪い女々しい奴かと思ったら、
たまに男の癖に意外な一面を見せてくる。

今回もそうだ。

馬をたった1日にも満たない、あの短時間で乗りこなす？

……あり得ない。

そんなことあつてたまるか！

「どうかしたのか？」

「あつ、母様……」

うわ、ヤバ……！

よりもよって母様と会うなんて……。匙投げたってバレたら怒られる！

「またあやつと何かあつたか？」

「……え？」

母様は、優しい言葉で問いかけきた。

……怒って、ない？

「悩みがあるのじゃろ？ それも陽絡みの。……全部顔に書いてあるわ」

「うっ……」

母様は凄い。

分かり易いのもあつたかもしれないけど、表情でどんなことを考えているのか、大抵わかってしまう。

「一体、儂が何年お主の親しておると思っておるのやら」

「はいっ！ 今年で十年目となりますっ！」

ハッキリとボクは答える。

この十年は、ボクの誇りだから。

「もうそんなになるか……時が流れるのは早いのう」

「十年なんて、あっという間でした」

「ほとんど代わり映えのない日々だったからの……と、そうではない！」

話を拗らせるでない！

と言われた。

今の、ボクのせい？

「まあ兎に角、話してみよ」

ボクはとりあえず、相談にのってもらうことにした。

気概なく話せる唯一に近い母様に、出来事も、思ったことも全て話した。

「ふむ。……羨ましかったのじゃな」

「なっ！ 違っ「わないぞ」……」

「その才に嫉妬してしまった。……だから認めたくない。そうじゃある？」

「……………」

凶星だった。

そして迂闊だった。

母様は聡明だから、ボクが心のどこかで考えていたことなどわかってしまう。

母様に話したのは間違いだったかもしれない。

ある意味間違っただけだったかもしれないけど。

「まあ、非凡の身である癖に、あやつは堂々としめないから。さらに、自分が非凡であることをわかってないことがなお性質が悪い」

母様もそう評価するの……。

なんだかムカつく！

「これこれ、嫉妬心剥き出しにするでないわ。……お主はお主、奴は奴じゃ」

少しむくれていると、頭を撫でてくれた。

「お主は僕の大切な娘。そうじゃろ？」

「はっ、はい！」

（因みに。

薊は、そんな愛らしい一面を自分だけに見せる娘のことが、堪らなく可愛いと思ったりしている。

結構な親バカぶりである）

「うむ、よい返事じゃ！　そうしたら瑪瑙、お主は陽のところへ戻れ」

「えー」

「えー、ではない 儂と牡丹の頼み、聞けぬか？」

「ううゝ、わかりましたよおゝ」

母様と……牡丹様、の頼みだから、不承不承ながらやることにする。
せつかく親子水入らずだったのに、水をさされた気分だわ。

陽は、自分の知らぬところで閻行の——些か理不尽である——怒り
をかっていた。

変わって広場。

S i d e 陽

相も変わらず、黒兎を走らせてる。

まだまだゆっくりとした速度だが、大分慣れてきたな。

「暇だなあゝ」

何やりやあいいのかわからんから、ぶつちやけ暇。

「誰か暇潰し相手になってくれる奴はいない……」

あ、ヤバ

「ここにいるぞーっ！」

お約束通り蒲公英が表れた。

こういった問いかけをすると、どこから聞きつけたかわからんが、
ほぼ確実にやってくるんだよ。

……凄くね？

「……………」

うん、現実逃避は止めよう。

……ヤバいつて言ったのは違うんだ！

ほら、あれだ、一応訓練中だから遊んではいけないと思ったただけであつて。

そつ、そつだ、言葉のあやって奴で……！

決して悪意があつた訳じゃ——

「どうかしたのお兄様？」

「ごめんなさい」

——すかさずの謝罪だ。

蒲公英は何が何だかわかっていない様子。

俺の罪悪感からの行動だから、わかつたら凄いんだけどさ。
ふう、危なかつたぜ……。

「……………って、えええ！ お兄様、もう馬に乗れる様になったの！？」

今頃気付く？
っていうか。

「そんなに驚くことなのか？」

「う、うん」

マジか。

馬術、つてのは案外難しいもんなんだな。
でも、半日でここまでできちまったぞ？
俺が凄いのか？

うん、やるな、俺。

「さて、続きをやるわよ！」

自分褒めてたら、さっきより不機嫌二割増の閻行さんが帰ってきた。
一度放棄したのに、平然と戻ってるって、どうよ。

ま、反論は認めない空気だから、黙って従うことにするけど。

「ごめんな蒲公英、呼んでおいて。埋め合わせは今度するからな」

「うん！」

さてと、やりますかねー。

陽は語る。

「このとき、自分で言ったのを後悔するとは思わなかった」と

第十一話（前書き）

ちよつと遅れた。

第十一話

Side 陽

「ちょ、蒲公英、引つ張らないで！ 痛い！ マジ死ぬ！」

「お兄様が埋め合わせはする、って言っただよお」

「うんっ！ 覚えてる！ だから、頼む、手放してくれ！」

「ええ〜！ そんなこと言うの？ たんぽぽ傷ついちゃったな」

「だったら、俺に合わせて歩いてくれよおおー！」

案の定の筋肉痛です、はい。

その所為で、ただでさえ歩くのもままならないのに、蒲公英さんは手を繋いだ左手を容赦なく引つ張ります。

拷問ですね、わかります。

「ぐおおおお……痛え……」

時折止まり、左手は蒲公英さんが放してくれないので、余っている右手で内腿をさする。

マジで黒兔に乗るのキツイ。

内腿で挟みつつ、踏ん張るとか尋常じゃない力がある。だから、内腿と腹筋あたりが凄く痛い。

本当に、足腰をもっと鍛えようとつくづく思ったりした。

「大丈夫？」

「まあ、なんとか、な」

蒲公英が顔を覗き込んでくる。
他の部位は別に問題ないしな。

「なら良かった！　じゃ、お兄様、早く早く！」

「そんなに焦ることなんてないだろ？」

「いいから、いいから」

何がいいのかさっぱりだ。

まあいいか。

蒲公英がいいならそれで。

……これで兄貴分らしくなれてるか？

えー、ここで現状の説明だ。

只今俺と蒲公英は街へと繰り出す途中。

前に約束した通り、埋め合わせをする為だ。

本当は、昨日に酷使し続けた筋肉が悲鳴をあげてたから、寝台の上から動きたくなかったんだがな。

しかしながら、蒲公英さんによって手を引かれ強制連行され、今に至ってるのだ。

きやー、視姦されてるみたい、萎えるうゝ。

（信じたくないことに）有名で名声が高く、人気者である母さん、すなわち馬騰の姪であり、性格的なものも相まってか、蒲公英は人気がある。

そんな蒲公英の隣に男——しかも手を繋いでる——、つまり俺のことが気にならないはずがない。

俺は、そ、そんなに見られたら、感じちゃう、な性癖の持ち主じゃないんで、発情なんてしないが、むず痒くなってくる。

無論、居心地が悪いという意味で、だ。

大体、こういった奇異の目で見られるのが一番嫌いなんだよ。

だから、あんまり往来を歩くのは好きじゃなかったりする。

かといって、——自分で約束した訳だし——蒲公英を無下には出来ない。

べつ、別に蒲公英の為なんかじゃないんだからねっ！

勘違いしないで、自分の言葉に責任を持ってるだけなんだから！

……………うん。

瑪瑙さんと真名交換したときの言い回しの真似、なんだが。

……男が言ったら、ただキモいだけだな。

もし金輪際、男でこんなようなことを言うような奴がいたら、問答無用で殴ってやるぜ。

おっと、話がずれた。

まあ、視線を受けながらも、人間臭いところを半ば強制的に歩かされている。

もう両の指では数えられないほど連れ出されていたから、慣れてる

つもりなだけでさ。

「お兄様、こっちこっち！」

「うん？」

俺は、それはもう凄まじく振り回されまくっていた。
服屋に入っては物色し、甘味処に入っては冷やかし、また違う服屋に入っては……と、蒲公英がはしごしまくった為だ。
知り合いの人、特にご老体には、時たま声をかけたりもしていたのもある。

蒲公英は、お洒落したいお年頃でありつつも、基本いい子なのだ。
蒲公英可愛いよ蒲公英。

そんなこんなで、俺は黙ってついていていた。

「ねえねえお兄様、似合う？」

「……………」

黄緑色の髪留めで横髪をまとめている。（原作でつけてたやつ）
おろした髪のままでも良かったんだが……うん。
なかなかどうして。

「これ買った」

似合ってるとは思ってたけど、……そんな即決されるほどあっけからんに表情変えた覚えはないんだがなあ。
つか、意外と高い。

「蒲公英さんや。……ちよつとここでまっけてくださいな」

「ええ〜！なんでえ〜！」

「さっきのゴマ団子のおかげで足りません」

まあまあ味のたつたよ、うん。

「もう、しょうがないなあ〜」

「そんな露骨な反応すんなよな。……多分、すぐに帰ってくるはず？」

「たんぽぽに聞かないでよ〜」

母さんに前借りを要求してくる予定だ。

でも、あの阿呆な母親の気分次第で交渉時間が激しく変わってくるからなあ。

あの阿呆、マジで性格、つか性質が悪い。

聞けば、面白さ第一主義だということらしい。

俺を文官候補にしたの、7割が面白そうだから、だったそうだし。

あの真面目は3割だけだったと聞いた時は、俺の拳は無意識に振り上げられてた。

それに気付いた薊さんに羽交い締めされ、

「無駄じゃ、……諦めい」
と諭されたけど。

ハア、……母さんに借り作るとか、気が遠くなるなあ。
土下座のみで事足りればいいけどなあ……。

Side 三人称

「遅い遅い遅ーい!!」

蒲公英はほんの少し、ちょーっとだけ怒っていた。
かれこれ半刻は経っているのにも関わらず、陽が一向に帰ってくる
気配がないからだ。

自分の伯母、すなわち牡丹が面白いこと好きなことを蒲公英は知っ
ているが、それを考慮し差し引いていたとしても遅いと感じていた。
そこに……、

「よう、爺さんよ……ただでさえクソ不味いラーメンに髪が入って
るなあ、どういっつもりだ!」

「アニキの言う通りだ!」

「そ、そうなんだな。美味しかったけど、お金は払えないんだな」

「そ、そんな!」

……それはもう典型的なごろつきが表れた。

蒲公英がいる呉服店の向かい側の、老夫婦が営むラーメン屋でからその声は聞こえた。

蒲公英は、その老夫婦と気の知れた仲であるので、ごろつきの自作自演であろうことを確信していた。

だからこそ、この街の長の姪としても、一個人としても、見逃す訳にはいかなかった。

「おじさんたち、言い掛かりは良くないと思うな」

「おじさつ！？ ……何が言い掛かりだって？ これを見る！」

そこには、すっかりスープまで飲み干された空のどんぶりの底に、黒髪があつた。

「（……うわ、わかりやすっ） でも、これにすぐに気付かないほうがおかしいんじゃない？」

「これでも退かないとは……言葉ではわからないみてえだな。体に教えこんでやるうか？」

「すぐに暴力で解決しようとする。……これだから脳筋は」

蒲公英は、やれやれと言わんばかりに肩を竦め、リーダー格アニキの男を煽る

「お嬢ちゃん、いい度胸じゃねえか。……表に出やがれッ！」

四人は大通りと呼べる、呉服屋とラーメン屋に挟まれた路地に出た。

（三人組を誘いだすことは出来た。後は、倒すだけ）

蒲公英はそれだけ考えていた。

その頃陽は猛然と駆けていた。

普段は眼帯で封じてある、黒目を開いて、だ。

実はその目、アフリカ人ばりの視力（5・0）を持っている。

右目だけでは見るに心許ない距離にあるものでも、左目では鮮明に見ることができる。

左目が封じてあるのは、そんな両目の圧倒的な視力の違いに、焦点を合わせるのに目の疲れが激しい等、いろいろ不便だという理由も含んでいた。

その曰く付きの左目によって、かなり遠くから、今の蒲公英の置かれている状況を把握していた。

蒲公英なら多分、そんじょそこらの奴には負けないだろうと、陽は思っている。

だが、陽にとって、家族の誰かに手をあげること事態が許せないのだ。

戦ならそうも言ってられない、と割り切ってはいるが。

「っ！ チェストオオオ！！」

チビが蒲公英に特攻をかけていたのが見えた陽は、スピードを落とさず、蒲公英との距離にして約五歩の地点で踏み切る。ジャンプ一番で蒲公英を飛び越し、そのままチビの顔面にドロップキックをお見舞いした。

「チビーーーー！！！」

陽は無事に着地し、チビは吹っ飛んでいつてしまった。

「蒲公英！」

陽はそれを一瞥し、すかさず振り返り左手を出す。蒲公英は疑問に抱きながらもその手をとった。

「いくぞ！」

「わっ、わわっ」

「てめっ、逃がすか！」

蒲公英の手を引き、駆け出す陽。

いきなりのことに少し慌てるが、なんとか足を運ぶ蒲公英。それを阻止せんとするアニキ。

「誰も逃げるとは、言ってねえが——」ひぎやっ！——あ、」

突如陽は足を止め、背後から駆けてくるアニキに、右脚の後ろ回し蹴りを放つ。

それはアニキの虚を付けた……そこまでは良かった。

しかし、いかんせん突然だったので蒲公英は止まれず。
繋いでいた左手が前に引かれたことによって、腰のひねりと左脚を
軸とした遠心力が十二分ついた踵がアニキの右側頭部に入ってしまった。

陽はちよつとだけ罪悪感を覚えた。

S i d e
陽

「大丈夫ですかー？」

正直マジで痛そうだな……。
ハッキリ言って、相当な威力だったから、死んでもおかしくはない。
いや、生きてますけどね。
しぶとい。

あ、なんかむさいのきた。

「あ、アニキの仇、なんだな」

「正当防衛だ。……つか勝手に殺してやるなよ」

「え？死んでない？」

「ああ。だから金置いて、そいつらもってさっさとどっかいけ」

「わ、わかったんだな」

「次はねえぞ」

金を置いてそそくさ（といっても、デブ体型かつ、のびてる二人引き摺ってるからかなり鈍重だが）逃げていった。

『うおおおおー!!』

『やるな、兄ちゃん!!』

途端、賞賛の声があがる。

正直うるさい。

こついうの嫌いだし。

「ありがとね、お兄様」

「「ありがとうございます」」

「うーん、蒲公英でも出来ることに横槍いれただけなので、感謝される筋合いはないんですけどね」

むしろ、邪魔したかもしれんしな。

終わりよけりや全て良しだが。

陽の、賊二人をいとも簡単にのした実力と謙虚ともとれる態度に、民衆からの評価もうなぎ登りに上がっていくのであった。

その後。

「お兄様」

って、うおっ。

腕を引かれたことによって、中腰みたいになる。

忘れていた筋肉痛がッ！

おおっ、パネエっ！！

そこに、頬に柔らかい感触とともに、聞き慣れない快音が耳に届く。
蒲公英の頬が若干紅く染まった顔が異様に近いんだがな。
何だったの？

「ホントにありがとね」

陽は語る。

「なんだかんだ、町に出るのが楽しみになっていった瞬間だったよ」と

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2814z/>

真・恋姫†無双「外史の外史、ここにあるぞーっ！（改悪？版）」

2011年12月19日11時56分発行